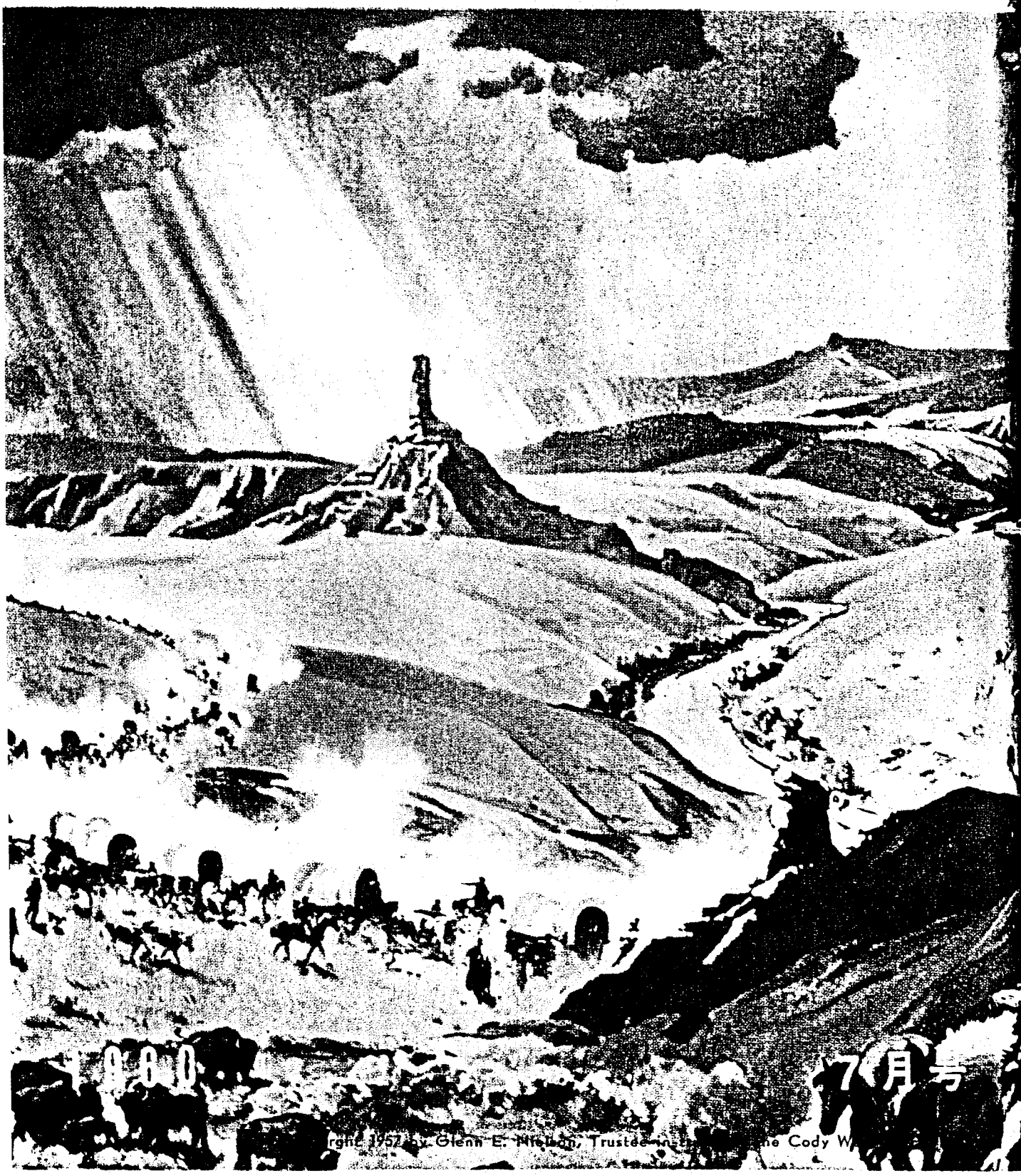
聖徒の道



末日聖徒イエス・キリスト教会

図書案内

教義と聖約
高価なる真珠　上質革製合本……一一〇〇円
モルモン経
教義と聖約
高価なる真珠　合本……三〇〇円
モルモン経（新訳）……二〇〇円
信仰箇条の研究……三三〇円
モルモンとは……一〇〇円
完成への道……二〇〇円
初等協会教科書……一五〇円
総合聖句の手引……一五〇円
日本系図探究要覧……一〇〇円
古代アメリカの生活……一〇〇円
旧約聖書物語……一五〇円
家督権の祝福……一〇〇円
扶助協会手引……五〇円

日曜学校用

宗教と生活Ⅱ……一五〇円
よきおとづれ……一〇〇円
聖書物語……一五〇円
福音の実践……一五〇円
聖典中の指導者……一五〇円

MIA用

役員と指導書の手引……一〇〇円
我らは奉仕する……一〇〇円
Mメン・グリーナーの手引……一〇〇円
演劇指導者基礎知識と脚本集……七五円
演説が上手になる法……一五〇円
社交ダンス必携……一六〇円
新しいフォークダンス……五〇円

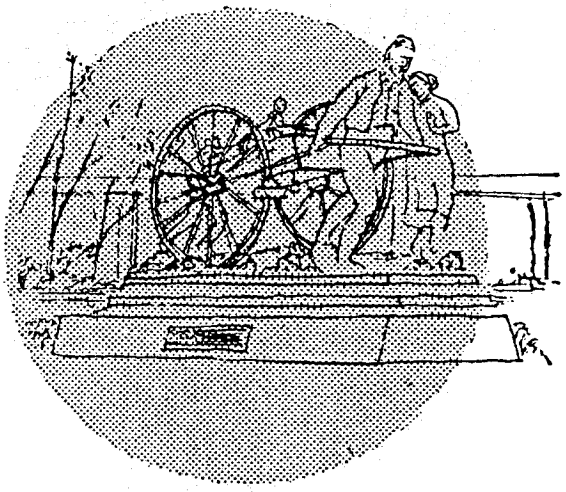
讃美歌及び歌集

末日聖徒讃美歌……三〇〇円
末日聖徒讃美歌抜萃……三〇円
子等は歌う……一〇〇円
レクリエーション歌集……四〇〇円

……註文は各支部長へ……

聖徒の道

1960年7月号



もくじ

〔予言者のことば〕

自由に就ての考え …… デビド・O・マッケイ…(194)

〔伝道部長メッセージ〕

開拓者の苦難を想う

……ポール・C・アンドラス…(196)

「モルモンの教義」

智恵の言葉 (14) …… 佐藤竜猪…(200)

手車隊の危難(開拓者物語) ……(204)

聖地を巡りて(1)…… 渡部正雄…(208)

ビスガの義勇兵(創作劇) …… 大塚昌治…(213)

末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粋(7)

ジョセフ・フィールディング・スミス……(202)

伝道本部だより …… (204)

或る若い石工の話 …… (207)

予言者のことば

「自由に就ての考え」

大管長　デビド・O・マッケイ

個人の自由は人間の身も霊もが生れつきもっているものである。神が人に自由意志を与えたもうた。従って生命に次いでそれは天から賜わった最大の賜物である。世の人々よ、あなた方はそれが本当であることを知っている。何となればあなた方は自身の自由を愛しているからである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

選択の自由はどのようなこの世の財産よりも一層大切にすべきものである。それは人間の霊が先天的にもっている。それは常人に一人のこらず神が与えたもうた賜物である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

人は、生きているという自覚と同じくらいはっきりと、選択をする能力のあることに気づいている。人の行う決定によって往々成功か不成功、平和か不満、幸福か悲惨かがきまるのである。このような決定は、起てという霊の呼び声にこたえるか、或いは屈服する傾向に負けるかのいずれかを決意させることがあるかも知れない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

人間は自由意志に応じた責任を負っている。神の律法と自然の法則とに調和している行動は幸福をもたらし、神の真理に反する行動は悲惨をもたらす。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

生命と自由の権利を各人が有っている国に住むことはすばらしい特権である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

自由意志によって責任が生ずる。もしも人が義に対して良い酬いを受け悪に対して罰を受けるなら、通常の正義はこの人に独立した行為の能力を与えることを要求するにちがいない。もしも人が始終強制によって正しいことをさせられるか、または手の施しようもなくそそのかされて罪を犯すならば、この人は正しい行いに対する祝福を受ける資格もなければ、罪の行いに対する罰を受けるはずもないにちがいない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

信仰が霊の進歩になくてならない原則であるのみならず、またすべての進歩になくてならない原則であることは本当である。しかし、人間の進歩向上に欠くべからざるものとしての信仰に次ぐものは自由意志である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

イエス・キリストは導きと恵みを施したもうた期間中始終個人の価値を強調したまい、今イエス・キリストの「御業にして栄光」であると言われている「人に不死不滅と永遠の生命とをもたらす」（モーセの書一〇三十九）ことの範例を示したもうた。身も霊もの自由という神の賜物によってのみこのような進歩ができるのである

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

自由人は、教育と経験によって人間が造られる道徳的秩序のある世界に住まわなくてはならない。人が「どこへ行こうか」または「何をしようか」またはシモン・ペテロが「主よ、私たちは誰のところへ行きましょうか」（ヨハネ伝六〇六十八）とたずねたようにたずねることこそ、人に選択の能力があることを暗に示している。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

神が人間に与えたもうた最大の賜物の一つを足の下に踏みにじる者、他人が自由に考えまた心のままに礼拝する権利を否定する者は誤りを広めるものである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

世界歴史の中にあるあらゆる争闘は、主として人間が束縛と強奪から逃れようとする努力、或いは自分の持っている自由の中に自らを守ろうとする努力によるものである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

国は個人のために存在するものである。個人は国のために存在するものでないことを常に心に留めるのは善いことである。イエスは個人を完成することによって社会を完成しようと努めたもうた。而して、自由意志を行使することによってのみ個人は完成の域にさえ近づくことができる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

正義と福祉とを施しその国民の中に繁栄を促進することを以て経綸の目標とする政府は最も良い政府である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

自由意志がなければ幸福のあるはずがない。もしも人が何事かもしくは何者かによって制限を受け、悩まされ、奴隷にされているならば真の進歩向上のあるはずがない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

他人の権利を侵害するためにこの神与の自由意志を人が用いるとき、その人はまちがいをしている。自由は放縦となりその人は罪人となる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

人が追求し選択するところによって成功か不成功か幸福か悲惨かになる。

開拓者の苦難を想う

ポール・C・アンドラス

千八百四十七年の七月、北アメリカの西部にある大ソルトレークの盆地にブリガム・ヤングとモルモン開拓者たちが到着したとき、この人たちはすでに大部分野蛮なインデヤンと野獣ばかりが住んでいる山や平地を越えて一千マイル以上の旅をしてきたのでありました。北海道の函館市から九州の福岡市までの距離がほぼ一千マイルあります。近代の鉄道輸送を以てしても一千マイルはなかなかの旅行でありますが、当時まだミシシッピー川の西に鉄道が出来て居りませんでしたから、モルモン開拓者たちは鉄道で旅行をいたしませんでした。この人たちは家財道具をみんなのせて牛か馬にひかせた車につきそい、歩いて旅をしました。

この旅をする途中で何千人というモルモン開拓者が死んで道のかたわらに葬られました。生命を完うしてその目的地へ着いた人たちも、このような旅のきびしさに疲れ果てていました。この人たちの予言者が指し示した所は不毛の荒地であって、開拓者たちがそこに着いたとき、この盆地の原っぱにたった一本の木がぽつんと立っていました。西の方へもう数百マイル行けばカリフオルニヤの金産地があり、オレゴン地方の肥沃な土地がありました。しかし、モルモン開拓者たちはその予言者ブリガム・ヤングの言葉に従うことにきめ、その荒地の土が非常に固くて最初に「すき」を入れようとしたとき「すき」のはが欠けてしまったほどであっても、どこへも行かないでソルトレークの盆地に止まりました。

モルモン開拓者がたどって来た道のかなたの端には、イリノイ州にノーヴー市がありました。モルモン教徒はこの時すでに全く独力でノーヴー市の建設を完成していました。モルモン教徒がはじめてこの土地を買入れ、千八百三十九年の五月にこの地域へ移り始めたとき、そこには家が九軒あっただけで、土地はきわめて湿気の多い沼地であって馬でさえそこを通りこすのに難儀をしたほどでありました。しかし、モルモン教徒たちは五年の内にその土地の排水をして、当時その附近ではアメリカで比ぶもののなかった人口二万に及ぶ一つの市を建てました。そこには頑丈なレンガ建ての家々、広大

な農場や果樹園、数々の店舗や学校および立派な神殿がありました。実に、千八百四十四年にイリノイ州のノーヴーは、イリノイ州のシカゴよりも大きな市でありました。

・・・・素晴しく建設されたノーヴー・・・・

千八百四十三年に、ある英国人作家はモルモン教徒の市ノーヴーを訪れ、次のようにその有様を記しました。

「この市は非常に大きくて、きれいに秩序正しく計画がしてある。すなわち各通りは道巾が広くて互いに直角に交わっているから、完成の暁には市の秩序と荘大さとは非常に増すにちがいない。市はミシシッピーの流れからの、ゆるやかな斜面の上に立って居り、神殿の側に立つときには、絵のようなまわりの景色をつくづく見ることもできる。あなたの側には世界の驚異である神殿があり、周囲と下の方にはいろいろな景色の中に点在する美しい店舗、大きな邸宅、きれいな小住宅を望み見ることもできる。……この市を平和と調和とが支配している。ここでは、他の都市に居るような酔漢はほとんど見当らず、またあの恐ろしいのろいの言葉或いは神を汚す誓いの言葉は耳に入らない。しかし、外部ではモルモン教徒に関して嵐と暴風雨と混乱とが満ち充ちているのに、内部では万事が平和と調和に満ち充ちている。(一)「モルモンとは」第八十九頁。

また千八百四十六年に、トマス・L・ケイン大佐はノーヴーを訪れて次のようにその有様を記しました。

「秋になって水位が低くなったミシシッピー川の上流をのぼって行ったとき、私は急流地帯を余儀なく陸路で行かねばならなかった。……私はいたるところむさくるしい、放浪生活をしている怠惰な移住者たちと、彼らの不注意な手で改善もせずに台なしにされた地方とを見あきてしまった。

私は旅路の最後の丘を下っていたが、その時、これまでとちがった非常に心持のよい風景が突然眼の前に開けた。

川の屈曲部に半円形にとりまかれ、美しい市が新鮮な朝日の下に輝いていた。その光り輝く新しい住居は堂々たる円天形の丘のまわりに並んでいる涼しい緑の庭園の中に設けられ、丘の上を立派な大理石の大建築がおおっていて、その尖っている塔の先端は白と金との光を放っていた。その市は数マイルに亘っているように見えた。そしてその向うの背景には、見事によく耕やされた丁寧な、うねが碁盤じま模様になっている美しい郊外が起伏していた。そしていたるところに勤勉と進取の気象と教養のある富のまぎれもない印しがあって、この風景を非凡なまた非常に目につく美しさの一つにしていた」(二)「モルモンとは」第九十頁。

モルモン教会の会員たちがノーヴーに美しい神殿を建て終るとすぐに無法な暴徒たちは襲撃を加えました。予言者ジョセフ・スミスとその兄ハイラムは、千八百四十四年七月二十七日無法な暴徒たちによって無残にも殺されましたが殺人者たちは処罰されませんでした。その結果、暴徒たちはその卑劣な行為に対して何らの手段もとられないと思い、モルモン教徒に対する暴行の罪をいよいよ増し、モルモン教徒たちは、銃口を突きつけられて、彼らの居心持のよい家庭から、彼らの美しい市から、冬空のひどい寒さの中をアイオワの荒野へ追い立てられました。

・・・・冬空に追い出された聖徒の群・・・・

次は「教会歴史粋」第四百二頁（英文）から引用した一文であり

ます。

「シュガー・クリークで野営をした最初の夜に九人の嬰児が生れた。天候険悪で寒さことのほかきびしく、人々は雨露をしのぐ適当な場所がなかった。女詩人エライザ・R・スノウはこの状態を筆にして次のように言った。『私たちが旅をつずけて行ったとき、母親たちはこれまですでに慣れていた人々以外には想像のできないほとんどあらゆる情況の下に子供たちを産んだ。或る者はテントの中で、他の者は荷馬車の中で、或いは烈しい雨の中で吹雪の中で。私は粗末な小屋の雨宿り場の出産のことを聞いた。その小屋の側面は地中に打ちこんだくいに結びつけた毛布でできていたが、木の皮でふいた屋根を通して雨がもっていた。親切な姉妹たちは水が落ちてくるとそれを受けるように皿を捧げて立ち、このようにして罪のない赤児が人生という舞台の上へ最初に入ってきたときに、この新来者と母とが水浴びをせぬように守ったのである。そしてあらゆる出来事を支配したもう神を信ずる信仰により、母子ともに何の悪い事も起らなかった。

これらの荒野の中で生れた赤児たちの母親は、森の中をさまよい嵐や暴風をしのぐことに慣れた野蛮人、すなわち文明と文化の楽しみと優美さとをかって味わったことのない野蛮人ではなかったことを忘れないで欲しい。この母親たちは、自然の野性の中で、その子供たちをあしやいぐさの中や、岩の洞穴のかくれ家で養育する母親たちではなくて、その大部分は東部の諸州で生れて教育を受け、そこでイエスとその弟子たちの教えたままの福音を信じ、自分の信ずる宗教のために、聖徒たちと寄り集って、苦しい情況の下にその信仰と忍耐と勢力とによって、その名が「美しきもの」を表わすノーヴーを造る助けをして居った人たちである。この母親たちは、いろいろな花で飾られ今やちょうど多くの実を結び始めた選り抜きの果樹で内容を豊かにした美わしい家庭をもっていた。

この母親たちは、賃貸をすることもなく売り払うこともなく、これらの家庭に今や最後の別れを告げて来た。そして一台、二台ある場合には三台の荷馬車に積めるだけのなけなしの財産を持ち、荒野を指して出発して来た。行く手は何所？当時この質問に対する唯一の返答は「神知りたもう」であった。（タリッヂ…モルモン教団の婦人。第三十二章）㈢ジョセフ・フィールディング・スミス著。教会歴史粋四百二頁（英文）

また次も「教会歴史粋」から引用した一文であります。

「充分春になってからノーヴーを後にするのが聖徒たちの意向であったが、聖徒らの信ずる宗教を憎み、聖徒らの持ち物や財産を貪った人鬼たちは、聖徒たちがそれまで待つのを喜ばなかった。彼らは家庭から追い出されて冬の真最中に大空の下で宿るところのない罪の無い人々が苦痛を受け雨風にさらされるのを少しもかまわなかった。『もしも、われわれの敵の脅迫と敵意のある示威運動がなかったなら、われわれは自分の家庭にそのまま宿って居ることもできたであろうが、われわれの敵は厳粛な契約をしたにもかかわらず、生命も自由も財産も顧慮することなくあらゆる障害物をすでにわれわれの途上に投げていた。あまりのことに、われわれが談判破裂を避ける唯一の手段は真冬に出立をすることであった。われわれの家庭、庭園、果樹園、農場、街路、橋梁、製粉場、公会堂、壮大な神殿、その他公けの改善の結果を、われ

われは、われわれの愛国心、工業、経済、真直ぐな目的および潔白な心の記念碑として、またわが国の憲法に対する不忠と怠惰と不正直の罪をわれわれに負わせた人々の偽りと悪事の生きた証詞としてのこして行く』とはブリガム・ヤング大管長の言葉である」(四)教会歴史原稿。

・・・・迫害を乗越えた聖徒達の信念・・・・

この暴徒たちは、サタンに勢いをつけられて、モルモン教徒たちが独特の宗教的信念を有っているというので彼らを襲撃しました。言葉を換えて言うと、モルモン教徒たちは、父なる神とその御子とが実際にジョセフ・スミスを訪れたもうたと信じているというのでノーヴーから追い払われました。彼らは天使モロナイもまたジョセフ・スミスを訪れたし、モルモン経は神の言葉をのせいてると信じていました。彼らは最初にバプテスマのヨハネが後にペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人がジョセフ・スミスを訪れて神を代表する権能を彼に授けたと信じていました。彼らは末日聖徒イエス・キリスト教会が真の神の本当の教会であると信じていました。モルモン教徒はこれらのことを信じていたために、むちうたれ苦しめられ、殺され女が乱暴され、くり返し彼らの家庭から追い出されました。彼らは自分の信仰を否定することを拒み、否定をする代りに彼らの予言者に従って一千マイルの荒野を横ぎってロッキー山脈の真中にある不毛の荒地へ入って行くことにきめました。彼らはだれも他の人の欲しない場所に植民をし、荒地をバラの花のように栄えさせることに成功しました。彼らは今日ユタ州に栄えて居り、また現在世界中にひろがっている大きな文明を確立しました。

今日当教会の会員を迫害することは大分鎮まって居りますが、それにもかかわらずまだひどい迫害を教会のために喜んで堪え忍びますか。あなたは百ぺんむちをうたれて背中の肉をずたずたに切られるよりはむしろ教会を去るでしょうか。あなたは家を略奪され焼かれるよりはむしろモルモン教を止めるでしょうか。あなたは怒った暴徒によって殺されるよりはむしろジョセフ・スミスは予言者でないと言うでしょうか。私共の先駆者であるモルモン開拓者たちは、後から来る者たちが神の真の教会の会員たる祝福を喜ぶことができるように、すべてこれらのことを喜んで身に受けました。私共の先駆者たちは、これらの真の教えを世界中にひろめる働きを続けることを現在私共を信じて任せています。あなたはこれらの人を失望させようとしていますか、またはどのようなぎせいを払っても良いモルモンになろうとしていますか。

・・・・どのように感謝の意を示そうか・・・・

千八百四十七年にモルモン開拓者たちがソルトレークの盆地へ到着して以来、毎年七月という月はモルモン開拓者と彼らの為しとげた偉大なこととを思い起す月になっています。毎年七月に全世界の末日聖徒イエス・キリスト教会会員は、特別の行事といろいろの活動をしてモルモン開拓者を尊敬いたします。私たちは、どうしたら最も良く私たちの感謝を示すことができますか。私たちは、どうしたら開拓者たちに最も良く尊敬を示すことができますか。それは教会の中に於ける私たちの義務を忠実に尽すことではないでしょうかもし私たちが喜んで迫害を受け教会のために死んでもよいならば、私たちは喜んで身を純潔に保ち、安息日を聖くし、智恵の言葉を守り、什分の一を納め、どこに在っても教会の諸活動に加わって教会を強くするのは当然ではないでしょうか。七月中私たちは新しく決心をして、迫害を受けても受けていなくても、良い末日聖徒となって一年中開拓者を敬い尊ぼうではありませんか。

「智恵の言葉」（十四）

佐藤龍猪

およそこれらの言葉を憶えて守り且つ行い、この誡命に従って歩むすべての聖徒らは、そのへそに健康を受けその骨に髄を受けん。また智恵と知識の大いなる宝まことに秘れたる宝を見出さん。

教義と聖約八十九〇十八・十九

一、沿　革

千八百三十二年十二月二十七日に、予言者ジョセフ・スミスは「かんらんの葉」（平和を伝える神の言葉）と自ら名づけた啓示（教義と聖約第八十八章）を受けたがその中にある教えに基いて（八十八〇百二十七―百四十一）あくる千八百三十三年二月に「予言者の塾」が組織された。「智恵の言葉」はそのじき後に与えられた啓示である（千八百三十三年二月二十七日）。「予言者の塾」は福音を宣べ伝えるため世に出て行く長老たちに修練を施す神聖な塾であって、その中に於て教えを受ける長老たちは聖くなくてはならなかった。ブリガム・ヤング大管長は「智恵の言葉」が啓示された当時の事情を次のように語っている。

「最初にこの塾は予言者ジョセフ・スミスの家の向う側にあったホイットニー監督の家の小さな部屋で始められた。教えを受けるために遠近からその小さな部屋へ集ってきた長老たちの中には、当時の習慣であったようにタバコをふかす者、噛みタバコ、嗅ぎタバコを用いる者などがあって、予言者がその部屋へ入って行くと中はタバコの煙で濛々（もうもう）として居り、床の上はまた非常に汚れている、ということがよくあった。こういうわけで予言者は熱心な祈りを捧げて主の導きを願い求め、その結果この啓示を受けたのである」（「教義と聖約の註釈」五七一頁）。

この啓示はその始めの部分に「これ一つの智恵の言葉なり。……挨拶に送るべき言葉にして誡命または強制によらずして……」と言ってあるが、なお且つ神の啓示であるが故に「始め誡命または強制によらずして下されたが、後になって、以後末日聖徒にとり誡命として施行されると『主の代弁者』によって宣言された主の律法または主の誡命……」とジョセフ・F・スミス大管長は言っている（「教義と聖約の註釈」五七一頁）。

二、「智恵の言葉」

「智恵の言葉」は「教義と聖約」第八十九章に載っているが、始めての方々のためにその全文を次に掲げる。

一これ一つの智恵の言葉なり。すなわちカートランドに集れる大祭司たちの会議と、教会員と、シオンに於ける聖徒たちのため、二挨拶に送るべき言葉にして誡命または強制に依らずして啓示と智恵の言葉によりて語られ、末の世に於けるすべての聖徒らに与えられるこの世の救いの中にある神の方式と御旨と

を公にするものなり。三すなわち、これらは今聖徒と呼ばれ、或いは聖徒と呼ばれ得る者にして虚弱なる者、およびすべての聖徒中最も虚弱なる者の能力に適応する約束を有てる原理として下さるものなり。四見よ、誠に主はかくの如く汝らに告げたもう。すなわち、末の世に於て悪しきを企つる人々の心中に現在存し、また将来在らんとする悪と企図とのために、われ啓示によりてこの智恵の言葉を与えて今や汝らを警め、また汝らを預め警むるものなり。五すなわち、汝らの中に葡萄酒または強き飲料を飲む者あらば、見よ、それは宜しからずまた汝らの御父の眼にも適わざるなり。ただ汝ら集りて御父の前に聖餐を捧ぐる時にのみ用うべし。六されど、見よ、これは誠に葡萄の実より造れる純粋なるものにして、汝らの手づから造れるものたるべし。七また言う、強き飲料は腹のためにならず。ただ汝らの体を洗い清むるためなり。八また言う。タバコは体のためにならずまた腹のためにもならざれば、人間のために良きものにあらずして、熟練と判断力とを以て用うべき、打身とすべての病める家畜に利く一種の薬草なり。九また言う。熱き飲料は体や腹のためにならず。一〇また、われ誠に汝らに告ぐ、すべて体のためになる青物は、人間の身体と活力と利用のために神これを定めたり。一一すなわち、その季節のあらゆる青物およびその季節のあらゆる果実、すべてこれらは慎みと感謝とを以て用うべきものなり。一二然り、獣の肉と空の鳥の肉もまた感謝を以て人間の用うるために主なるわれ定めたり。さりながら、これらは控え目に用うべきものなりとす。一三また、これらは冬季と寒き時と飢饉の時以外に用うべからざることわが心に適えり。一四すべての穀類は人間と獣類の生命の糧として用うるために定められる。これらはただに人間のみならずまた野の獣、空の鳥および地の上を走りまた這い歩くすべての野獣のためにあるものなり。一五而して、飢饉の時と飢の甚しき時にのみ、人の用いんがために神これらの生物を造れり。一六すべての穀類は人間の食用としてよろし。蔓に生る実もまた然り。そは地下、或いは地の上何れかに実を結ぶ蔓なり。一七さりながら、人間には小麦、牛にはとうもろこし、馬には燕麦、鶏豚および獣のためと、またほかの穀類も然るが如く温和なる飲料を造るためとに大麦を用う。一八およそこれらの言葉を憶えて守り且つ行い、この誠命に従って歩むすべての聖徒らは、そのへそに健康を受けその骨に髄を受けん。一九また智恵と知識の大いなる宝まことに秘れたる宝を見出さん。二〇而して走れども疲れず、歩けども気を失うことなからん。二一主なるわれ彼らに一つの約束を与う。すなわち、さつりくの天使はイスラエルの小児たちが如く、彼らを過ぎ越して屠ることなかるべし。アーメン。

三、「強き飲料」は腹のためにならず。

「主イエス・キリストの御名によってイスラエルの長老たち、特に酩酊癖のある者たちに告ぐ。今より後『強き飲料』を飲むことなかれ」、「中にはここから出て行けばすぐに飲まなくてはならぬと思う者もあろうが、これに就いて私の言うことを（医者と思って）聞いてもらいたい。君たちが丈夫な手足を持って働ける以上、活動をつずけるために強い酒がなくてはならぬなどとはおろかなことである。人間の体は栄養を与えて大切に養わなくてはならない。自然の働きが必要とする以上

に無理な刺戟を与えるものを体内にとり入れるときは人の寿命をちぢめる。私は医者でなくてもそれ位は知っている。君が今日は疲れた、ちょっと一杯やりたいと思うときにはバタをつけたパン、またはミルクで煮たパンを少々摂り横になって休め。元気をつけるために、なかば酔わなくてはならぬほどひどく働くな。君がもしこの勧告に従うならば、常に元気と健康が満ち溢れ、英知と歓喜が増すにちがいない」、「酒を飲むことを止めよとは私の与える強い勧告であり命令である。もし私に世人の認める勢力が与えられるならば、この社会の中に一人の酔っぱらい、一人の盗人、一人のうそ吐きも居らせないでろう」（ブリガム・ヤング大管長講話録一八四頁、および「教義と聖約の註釈」五七三頁参照）。

四、タバコは体のためにならず……また「熱き飲料」は体や腹のためにならず

「智恵の言葉は『熱き飲料』とタバコの使用を各々禁じている。私は『茶、コーヒーを飲んではいけないと書いてないぢゃないか』と言っているのを耳にしたことがある。正にその通りである。然し、この啓示が出た当時、人々が摂る習慣のあった『熱き飲料』とは『茶、コーヒー』にほかならなかった」、「イスラエルの長老のすべてに告ぐ。もしもタバコを用いないと、起きている時に体がだるかったり眠かったりするならば、床に入って休めと私は言う。いつまでそうしているのか。床から起き上って理性のある人、すなわち自分のおろかな欲に支配されない人として仕事に就けるまで休んで居たまえ。また教会の姉妹のすべてに告ぐ。もしあなたが朝お茶を一ぱい飲まないと起き上って洗いものができないと言うならば、床に入って休めと私は言う。いつまでそうしているのか。茶の気が体から脱けてしまうまでそうしていなさい。それは一月かかるだろうか。一月経ってよいではないか。もしそれが三月、半年、よしんば一年かかったとて茶、コーヒー、酒、タバコに負けるよりは理性のある人間として仕事ができるために茶、コーヒー、酒、タバコの気が体の中から脱けてしまうまでそうしている方がよい。これらは体の組織を害し、財布から金を盗み、貧しい人々から生活の必需品を奪うわるものである」（ブリガム・ヤング大管長講話録一八四頁参照）。

五、健康食

「働いて疲れた時には茶、コーヒー、酒、タバコのような刺戟物を必要とする。または元気を回復して一層働くためには、麻酔性の物質も必要であると論ずる人もあるが、このような刺戟物を用いる代りに人は休息によって元気を回復すべきである。薄茶をし、少しく食し、適度の労働をせよ。然らば、われわれは一層賢明と健康と富とを具えた民になるにちがいない」、「山間の雪や泉から流れ下る清冽な水ほど健康な飲み物はない。これが最上の飲み物であるから常に用いるべきである」、「私は食を断って飢えよとは言わない。各自の胃に適した適量の食物こそ健全な食である。常に胃の腑を完全に健康な状態に保て。今や市民はかなり生活が楽になって、果物を豊富に摂っている人が多い。果物は大人にも小供にも至極健康に宜しいから、季節の果物を多く摂るべきである」、「人がだんだん金持ちになって安楽な住居を建て、前よりも一層豊かな生活をして甘味の強い菓子、プディング、ローストビーフのたぐいを食べたいだけ食べるようになると、たえず何かと病気をするようになる。彼らの家に入って見よ。そこに

は牛肉や豚肉の料理、アップルパイ、カスタードパイ、ミンスパイそのほかあらゆるぜいたくな食物がある。これらの人々は自分自身やその子供たちの寿命をちぢめるための生活をしているのだ」、「君たちは智恵の言葉をつまらないものだと思うかも知れない。これを守らなければつまらないものであるが、守って行う人々は長寿の基をつくっているのである。これらの人々の寿命は百才はおろか、後には数百才となるであろう。その時これらの人々は腹一杯茶、コーヒーを飲み、朝の目覚めと夜寝る前にブランデイを一杯傾け、明けても暮れても牛肉、豚肉、羊の肉、パイ、菓子のような食を摂っているだろうか。否々、その人たちは人類の始祖アダムとイヴがしたように主として果物と単純な食物を摂り決して胃の腑に過重な負担をかけていないにちがいない」（ブリガム・ヤング大管長講話録一八八頁参照）。

「山草を食って育った牛の肉は野獣の肉のように宜しく、柵飼いの牛の肉とは本質が異う。しかし、われわれは魚を食べることができる。君たちは卵をとるために鶏を飼いなさい。この地方でよく出来るあらゆる種類の果樹を栽培しなさい。魚は野菜と果物の次に位する健康な食物である」、「人は安楽な部屋で暖い火に当り、茶、菓子などを摂り、丁寧な取扱いを受けて柔いベッドに眠るならじきに死んでしまうが、一ぱい積っている雪の中にほうり出されると仲々長生きをするように出来ているものである」（ブリガム・ヤング大管長講話録一八七―一九二頁参照）。

余録

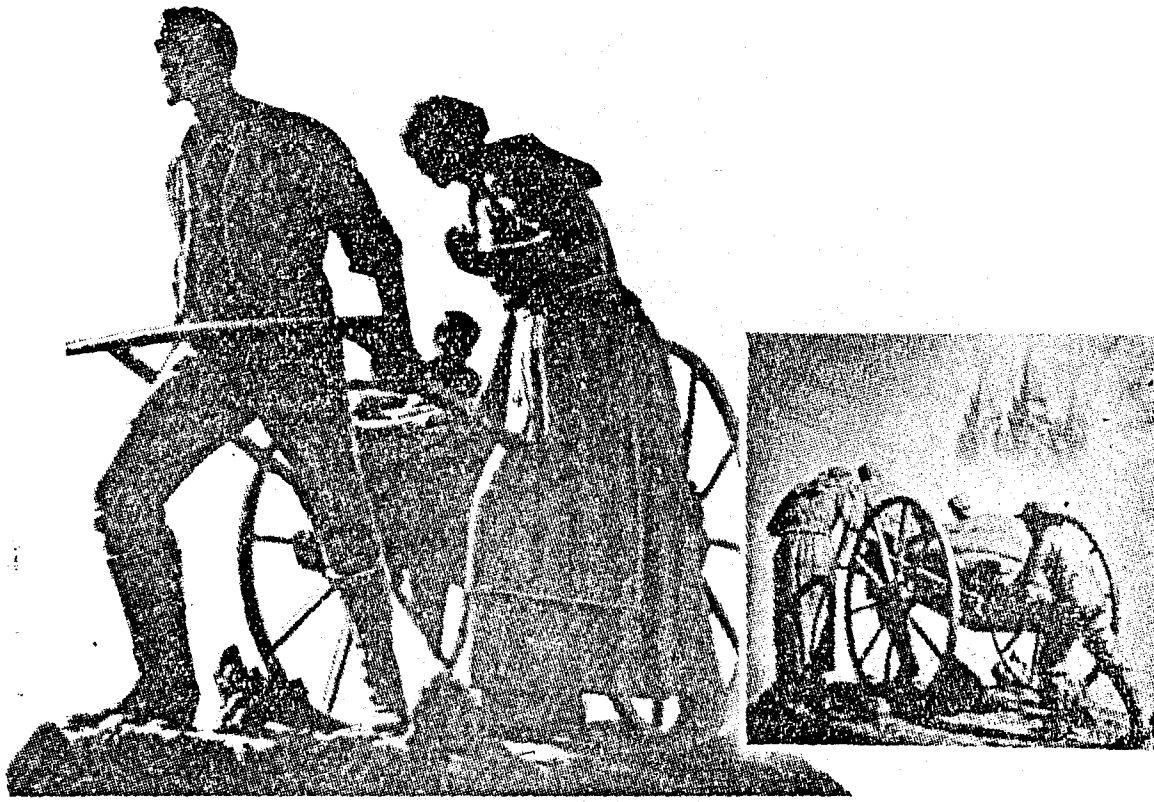
千八百七十八年というとジョン・テーラー大管長の時のことであるが、その時デビド・ホイットマーがオルソン・プラットとジョセフ・F・スミスの両長老に次のような話をしたことが誌されている。

「わしがジョセフとオリヴァと一緒にフェイヤットへ戻ってきた時のことだった。わしらは皆馬車に乗って、わしとオリヴァは旧式な木製の腰かけに腰かけ、ジョセフは後ろに腰をかけていたが、馬車が見通しのよい広々としたところを通って行くと、非常に愛想のよい上品な顔つきの老人が不意に馬車の側に現われ「やあ今日は、大そう暑いのう」とわしらに挨拶をすると、手でもってその顔をつるりと拭いた。わしらも挨拶を返すと、ジョセフが合図をしたから、同じ方向へ行きなさるなら一緒に乗って行きなさらんかと言うと「いや、わしはクモラへ行きますんぢゃ」と非常に快活に答えた。クモラという名前はわしにとって聞いたことのない名前だったので、クモラが何のことかさっぱり解らなかった。わしらはその老人の顔をじっと見つめ、それからお互いの顔をじっと見つめ合ったが、わしが不審そうにジョセフの方へふりかえった時にその老人はふっと消えてしまい、二度とわしには見えなかった」。ホイットマーはその老人の様子を説明してから次のようにつけ加えて言った「あれがモルモン経の版を持っている使者であったのだ。あれが、わしらがハーモニーへ立つすぐ前にジョセフからモルモン経の版をとり返した使者であったのだ」（アンドルー・ジェンソン「歴史記録」二〇九頁、「教義と聖約の註釈」五〇八頁参照）。

† † † † † †

<開拓者物語>

手車隊の危難



千八百四十七年七月二十四日、ブリガム・ヤング大管長は開拓者の主力を伴って始めてソルトレーク盆地へ入った。その日大管長は病いのためウイルフォード・ウッドラフ長老の馬車に休んでいたが、渓谷から上って盆地を見渡す崖のふちに立ったとき、よく見えるように馬車を廻してくれとウッドラフ長老に頼んだ。馬車を廻すと、大管長は黙って暫しの間ソルトレークの盆地をじっと眺め入っていたが、やがて満足した調子で言った「これこそあの場所だ。あそこへ乗り込め」。

その後つずいてソルトレークに入って来た開拓者の隊は、馬車に一杯荷物を積んで馬、牛、ろばなどと共にやって来たのであった。しかし、人々は大てい馬車に附き添って大平原を徒歩で横断しなくてはならなかった。移住する人の数が次第に増して来たので、これに適当するほかの方法、もっと費用のかからない方法をとらなくてはならぬだろうということがわかって来た。大管長会はすでに千八百五十一年に、アイオワから西の方へ旅行するには手車を使うがよいと言うことを提案していた。実際その当時、手車を使って比較的愉快に且つ安全に大平原を横切ってソルトレークへ入って来た者もあったのであるから、

一般に手車隊で旅行をせよと言うことになったのであった。しかしながら、この考えが米国以外の聖徒の心に始めて印象を与えたのは千八百五十六年ころであって、その後もこの考えがくり返し提案された。その聖徒らがこれをよく理解した時、彼らは誰も彼も熱心に手車運送の提案に賛成した。英国に在った聖徒は特に熱心であった。手車で必要な物を運ぶとすると、英国の聖徒たちはリバプールからボストンまたはニューヨークを経てアイオワ・シティに至り、そこで大平原を横切る準備をしてソルトレークまで来るのに約四十五ドルしか要しなかった。ソルトレークまで来る資金に乏しい人々、または「永久移民基金会社」から金を借りることを欲しなかった人々にとって、これは疑いなく好都合なことであった。

千八百五十六年六月九日、エドムンド・エルスワースに率いられた二百六十六名から成る手車隊がアイオワ・シティを出発し、ダニエル・D・マッカーサーに率いられた二百二十名から成る一隊は、それから二日経った後、先発隊のあとにつずいた。更につずいてエドワード・バンカーが指揮するウエールスの聖徒から成る小さな隊が第三番目に出発した。それは六月の二十三日のことであった。これら三つの隊は、手車に一切合財積みこんで野を越え山を越え、川を渡り谷をわたり、手車を押したり引いたりしながら約千三百マイルの長途を徒歩で踏破した。その途中、老人や虚弱な者の中に数人の死者が出たけれども、これを除いて三つの隊はことごとく無事ソルトレークに到着した。エルスワースとマッカーサーの隊は、途中手車が破損したため修理に手間どって九月の二十六日に到着、大管長会を始め多数の聖徒に、エミグレーション・キャノンでブラスバンドの吹奏を以て迎えられ、一緒になって市中へ入り大歓迎を受けた。これら二つの隊は九十六台の手車、五台の牛車、二十四頭の牛、四頭のろば、二十五張の天幕をもってソルトレーク入りをしたのであった。第三番目のバンカー隊も重大な損害を受けずに十月二日ソルトレークに到着、前二者と同じく盛んな歓迎を受けた。

さて、このほかに二つの隊が大平原を横切る旅の支度をして居たが、それは英国とスカンヂナヴィヤの聖徒から成る隊であった。彼らは六月の終りと七月の始めころ、西部へ旅する出発点であるアイオワ・シティに到着したが、そこで旅行に必要な手車と天幕の準備がしてないことを知った。従って、彼らは旅行に欠くことのできない品物が出来上るまで、または買入れることのできるまで出発を延ばさなくてはならなかった。もはや時季が過ぎているから出発を延ばすことは危険であった。七月の十五日にもなって大平原横断の旅行をしてはいけないのであったが、第一隊の出発準備がこの時完了した。ジェームス・G・ウイリーに指揮されたこの手車隊は、七月の十五日にアイオワ・シティを、八月の十九日にネブラスカのフロレンスを出発している。これにつずいてエドワード・マーテンの指揮する第二隊が第一隊におくれること約二週間、八月の五日になって出発した。

ネブラスカのフロレンスでは、そこから更に旅行をつずけるべきか、またはウインター・クオータース（越冬用宿舎）に入って時季を待つべきかについて議論があった。すでに時季がおくれているからこれ以上旅行をつずけることは危険であるという反対の声があったが、大多数の者は旅行をつずけることに賛成であった。この重大な問題を論じていたとき、タイ国並びにセイロンの伝道から帰途に就いていたリーヴァイ・サヴェージ長老は手車隊の兄弟たちに向って、このように時季の

おくれた時に旅行をしてはいけないから越冬用宿舎に入って、春の来るのを待つ方がよいと忠告した。彼は大平原を旅行した経験があるので、手車隊がおそらく出逢うにちがいない危険をよく知っていた。しかし彼の忠告は聞き入れられなかった。この時サヴェージ長老は静かに言った「私の今言ったことは皆本当なんだ。私はそれを身を以て知っている。しかし君らがこれから前進するつもりなら私もついて行こう。私はできるだけ君らを助けよう。一緒に働こう。共に休み、共に苦しみ必要なら君らと一緒に死のう」と。

手車隊の方針は決定した。彼らは冬が過ぎるまでここに留るよりむしろ前進しようと決めたのであった。彼らは寒風が襲来するよりも前にソルトレークへ着けると充分に信じていた。これが致命的の思い違いであった。サヴェージ長老ただ一人を徐いて、手車隊の大部分の者が考えても居なかったほどその年の冬は早く始まり、しかも例年にない厳しさでやって来た。

手車隊の旅行の前半は、時々車がこわれたりインディヤンの襲来の恐れがあったりしたほかは充分快適であった。彼らは毎日順調に進んで行ったが、進むに従って次第に難路にさしかかり、絶えず車の修理をしなくてはならなくなって、道がだんだんはかどらなくなってきた。彼らの手車のがっしりしていないことと、よく枯れていない材料であわてて造ったこととは、まだ遠くも行かないうちに分解してしまうおそれを生じ、車の修理に長い時間をとった。

まだ九月の半ば、彼らがプラットに居た時始めて地上に霜を見た。その霜は日が経つに従って多くなって行った。九月の三十日、ウイリー隊は彼らの目的地の東方五百マイルにあるフォート・ララミーに到着し、その翌日また彼らの旅をつづけて行った。これから先、彼らはこの旅行のうちで最も険難な道に出逢うこととなり、しかも厳冬は急速に近づいていた。食料は次第に欠乏し、一人一人の割り当てがきめられた。更に悪いことに、山路にかかった時、運送機関がない上に急な坂を登らなければならず、彼らはやむを得ず荷物を捨てなくてはならなかった。道がはかどるためには着物も寝具も道側に置いて行かなくてはならなかった。薄着をした上に、ろくに雨風をしのぐ物もなく、早くもやって来た肌をつんざく寒風の中に彼らはふるえていた。これがために彼らはひどい苦しみを受け、体力のない者たちは次々に死んで行ったが、道をせき立てられるままろくに葬いをすることもできず、道側に立てた形ばかりの墓標の下に葬るほかはなかった。このような逆境の下にあっても彼らは前へ前へと進むほかはなかった。何ものをも容赦しない厳冬が間もなく襲って来て全員を屠り去らぬようどうしても道を急がなくてはならないから、何人をも待っていることはできなかった。

前の隊がこのように困難をきわめているうちに、後の隊はどうであったか。マーテン隊の大部分は女子供であったから、この険悪な天候に加えていよいよ増大する困難によって、先行した隊よりも多くの死亡者を出した。スイートウォーターの近所でこれらの手車隊は厳しい寒さと大雪とに出逢い、毎日毎日何人かが死んで行ったが、ある時暴風雪の去った後一日のうちに十五人の者が死んで行った。彼らは今や絶体絶命になった。

この時幸いなるかな、二三人の帰還宣教師が軽車を駆ってこの地を通りかかった。彼らは事態容易ならぬことを知って、一鞭馬腹に加えるや全速力を以てソルトレークへ急行した。ソルトレークでは大会が開かれている最中であったが、ブリガム・ヤング大管長はこ

の報らせを聞くや直ちに大会の中止を命じ、救援隊に食料、衣服、寝具を持たせ、時を移さず現地に急行させた。救援隊が来るぞという報らせを持って先発したジョセフ・A・ヤングとスティーヴン・テイラーの二人が寒さと飢えにうちのめされたウイリー隊に近づいたとき、これを認めたウイリー隊の人々は本当に「天使が助けに来た」と思った。救援隊が道を急いで行くと、彼らはプラットとスイートウォーターの間にある溪谷の中でマーテン隊を発見した。ここは後に「マーテン溪谷」と名づけられたが、その山峡にマーテン隊の人々は一団になって死を待っていた。彼らの周囲にはこの溪谷で死んだ人々を葬った形ばかりの墓標が林立していた。救援隊の姿を見た彼らの喜びは筆にも口には表わすことができない。

かくして、生き残った手車隊の人々は十一月にソルトレークに着いた。ウイリー隊は十一月の九日に、マーテン隊はそれより三週間おくれて到着した。ウイリー隊は出発の当時四百人から五百人の隊員であったが、その中七十七人が死亡し、マーテン隊は出発当時の五百七十六人の約四分の一が道側に設けられた墓標の下に淋しく葬られた（「歴史粋」四四―四九〇頁「英文」参照）。

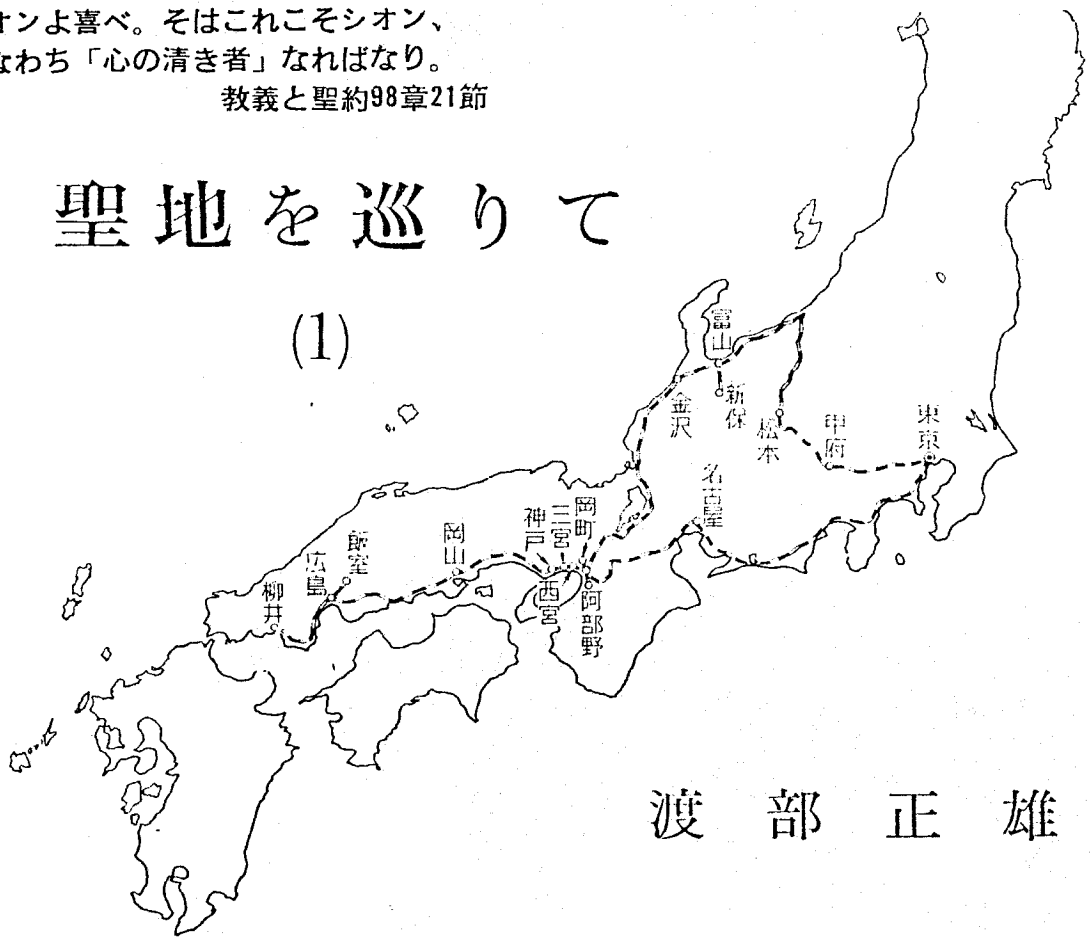
「或る若い石工の話」

彼はある山奥の貧乏な村で生れた。この村のまわりは全部国有林で「一木一草」をとっても傷つけても法律違反となる。北国のこの村では春の来るのが遅くて冬の来るのが早い。山の奥の奥に入ると谷を埋めている残雪は六月の半ばになってもまだ溶け切っていない。十月の始めともなれば向いの山の頂きにもう初雪がやってくる。こんな所で何ができよう。ジャガイモもトマトもナスも大根もほかで出来るものの半分位も育たない。ニワトリを飼えば大きなタカにさらわれる。ウサギもそうだ、犬の子さえもさらわれてしまう。彼は附近の鉱山の坑夫になってハッパを仕掛ける穴を穿っていた。坑道の中は暗いけれども夏は涼しく冬は暖かであった。彼は黙々として働いた。そのうちに鉱山が衰えて職を失った。彼は山を下って里へ出て或る石切り場で働くことになった。彼はまだ若かったから人生に大きな希望を持っていた。芸術家になろう、しかも彫刻家に。彼は芸術が人生で一番尊いものに見えた。そしてその理想に形を与える彫刻家が人生で何よりも尊い者に思えた。彼は自分の胸の中に燃えているものに形を与えたくてしかたがなかった。しかし石切り場の仕事はただ大きな石を石山から切り出すだけのことであった。彼は失望した。毎日毎日の仕事は灰色のようで何の感激もなかった。その上に山とちがって里は、夏は炎熱焼くが如く、冬は指が切れる位寒かった。彼は石切り場を去って或る彫刻家の門を叩いた。この彫刻家は有名な芸術家であって最近は建築の方面でも立派な仕事をしていた。彼は今度こそやり甲斐のある仕事をすることができると思った。しかし彼の先生が与える仕事は、前の石切り場の仕事と同じように単調な石のブロックを造るだけのことであった。来る日も来る日も単調な石のブロックを造るだけのことであった。彼は一年ほど働いたが仕事に飽いた、というよりも人生の意義に失望を感じた。そしてこの先生のところも止めてしまった。彼は町の大通りに出た。そこには今や完成しようとしている市庁舎の大建築が彼を圧するようにそびえていた。彼は顔をあげて正面玄関の上を飾っている彫刻を見た。それは市庁舎の正面を飾るにふさわしい見事な彫刻であった。彼はそれをじっと見ているうちに、何だか自分が彫り上げた彫刻であるような気がしてきた。そんなはずはないと思って目をそらしたが、また何とも解らぬ「親和力」が彼の目をその彫刻の一つ一つの線に引きつけて行く。彼はもう一度よくよく見た。すると彼は解った、あの一つ一つの線を浮べている石のブロックは自分が彫ったんだということを。彼にとって何の意味もないと思えたあの単調な石のブロックは、一つの「計画」の下に組織されてみると、それは人の心を感動させずにはおかぬ力をもった立派な芸術であった。彼は人生の意義を了解した。

シオンよ喜べ。そはこれこそシオン、
すなわち「心の清き者」なればなり。
教義と聖約98章21節

聖地を巡りて

(1)



渡部正雄

○名古屋支部

五月二十九日は名古屋支部の支部大会であった。早朝雨が降っていたし多分駅からさほど遠くあるまいと、たかをくくって、タクシーを捨ったら少し迷った為でもあろうが三百円近くとられたのには驚いた。さすがに名古屋は日本第三の大都会だ。支部の建物も実に堂々たるものであり部屋数も多く、又ホールの椅子なども備え付けの立派な長椅子で荒掛の背後に讃美歌のボックスが造ってあり本建築の趣があり、これでは他の各支部のように集会毎に讃美歌の出し入れの必要もなく従って讃美歌を損ずることも少く場内も常に整備されてあってよいなあと羨しく感じた。さすがに讃美歌の元締めとして昔から働かれ今又新しき讃美歌の編纂に寸暇を惜しくて献身して居られる高木兄弟柳田姉妹父娘の働かれる支部だなとうなづかれた。

アンドラス地方部長管理の下に神権会が始められ最近改宗された古芝兄弟の強い証に次いで地方部長同僚宮教師のブラック長老の神権に就ての話があり、高木兄弟の激励の言葉を以て終ったが、その頃には雨はすっかり晴れ上って素晴らしい大会日和となり六十名余りの出席者は殆どホールを埋めつくし、午前十時半に日躍学校会長伊藤兄弟司会の下に一般大会が始まった。最初にお客さんのヘース姉妹が帰国を前に挨拶され、松浦姉妹が流暢に英語を通訳された。ヘース姉妹は、世界の何処に在っても教会は一つで私たちは一つのみたまによって結ばれている兄弟姉妹であることを力説し、今迄によせられた名古屋支部会員の暖い友情に感謝された。ヘース姉妹は、世界の何処に在っても教会は一つで私たちは一つのみたまによって結

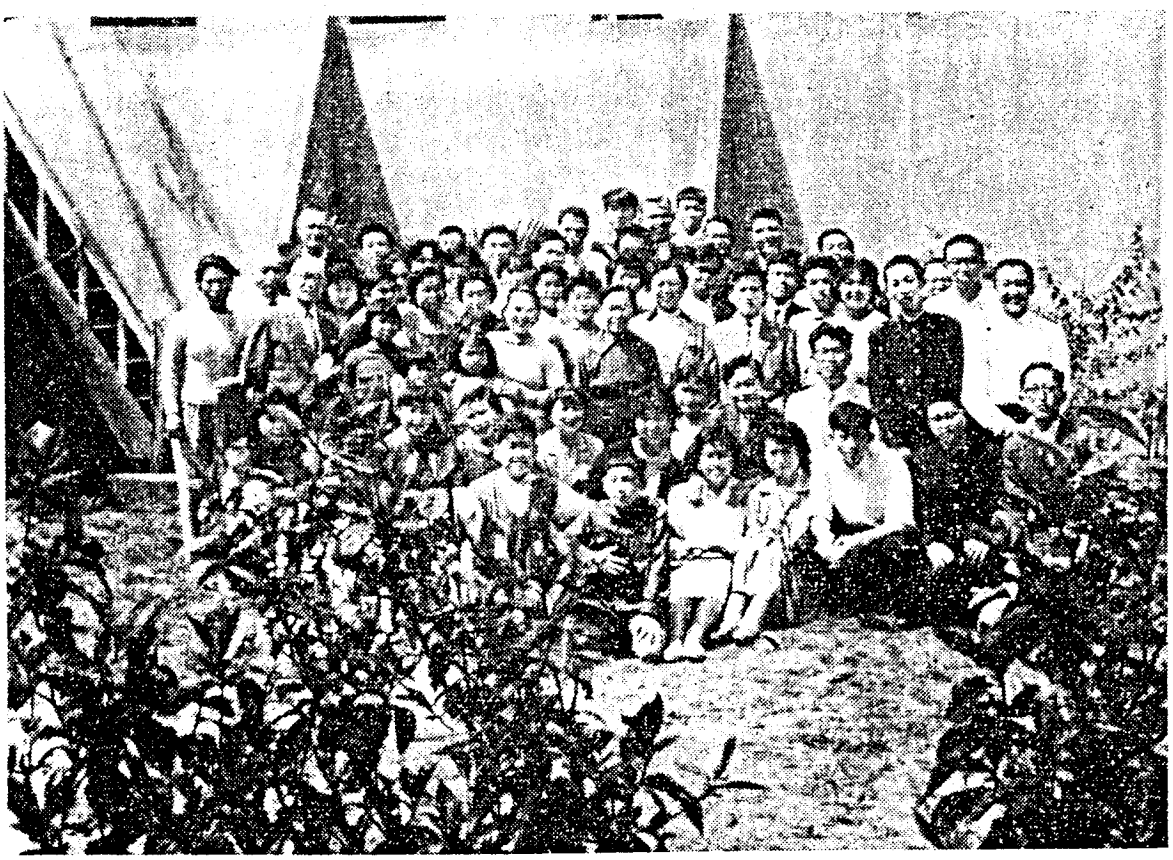
ばれている兄弟姉妹であることを力説し、今迄によせられた名古屋支部会員の暖い友情に感謝されたが会員一同も尽きせぬ名残を惜しんで居られたようだった。

テーマはイテル書十二章四節であったが支部長の南東長老は謙遜に、伝道に召されて国をたつ時の次のようなお父さんの訓誡を引用し、

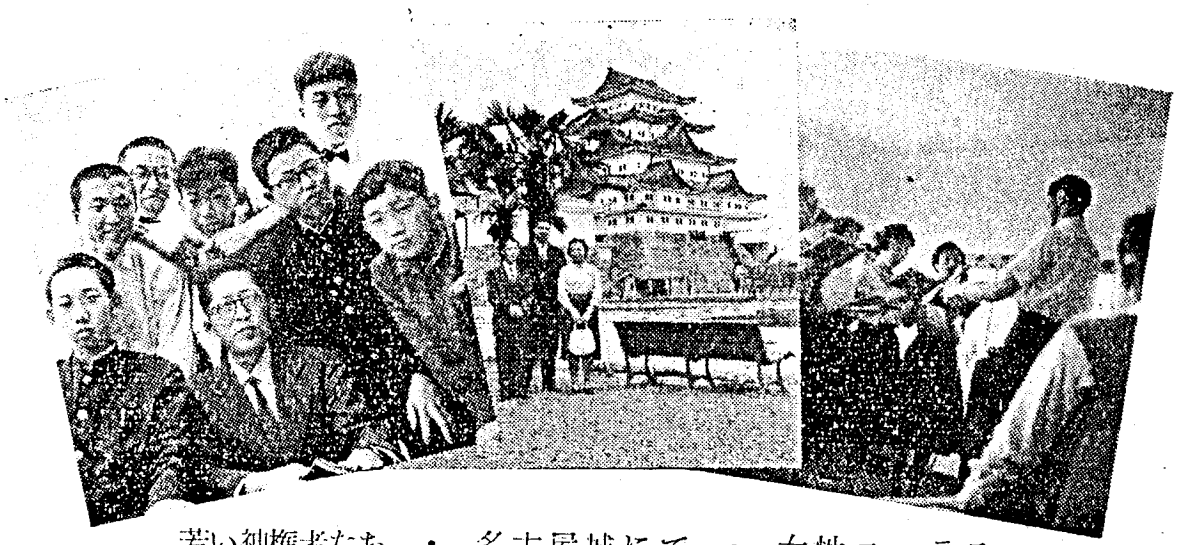
〃今まで貴方から多くの言葉を聞いたが行いを見なかった。〃

自ら実行して模範を示すべきことを強調された。私は支部長さんに如何にして教会に人を導くかに就て話してくれと頼まれて、東京北支部の丹羽姉妹が郷里の鹿児島に系図探求に帰られた時、多くの親戚がこれに協力して下さったが更に九十才の御母堂が姉妹についてはる〴〵御上京され、たとえバプテスマの冷水で死ぬようなことがあっても本望であると願って受けられた。本伝道部始まって以来の最高年令者又全教会を通じてもその比類の殆どない素晴らしい改宗記録を引用して系図の働らきを通じての伝道の効果と重要性を強調した。柳田姉妹母子を交えた支部コーラスは誠に素晴らしく大会気分を一段と強めアンドラス地方部長の説教を以て午前の部を閉じ、午後は第二副支部長成田兄弟司会の許に聖餐式証会が開かれ多くの兄弟姉妹が立って次々と強い証を述べられたが時間が足らずに立てない人も多く居り一同感激の内に会を閉ぢた。

初夏の陽燦々と注ぐ庭で三々五々にかたまって楽しい軽食を終えた後系図の特別会が開かれたが第一副支部長であり系図委員会の会長である柳田兄弟指導の下に多くの兄弟姉妹が参加して活発な質問があったのはほんとに嬉しかった。翌日は柳田姉妹自ら操縦される自家用車で金のシャチホコもまばゆい名古屋城を見せていたゝいた上、駅迄送り届けられ



名古屋支部大会



若い神権者たち　・　名古屋城にて　・　女性コーラス

私は名古屋支部はアメリカのワード部なみですねと感嘆し暖い御厚情に心から感謝申上げたのであった。

○阿倍野支部

汽車は一路大阪へ、そして、梅田駅から地下鉄で天王寺へ行き更に市電に乗換えて一つ目の停留場のすぐ先に異国風の堂々たる構えの二階建洋館、阿倍野支部を発見した。支部長のポーター長老陣頭指揮で支部建物の内外を清掃して居られた。少し古い建物だが修繕したら立派なものになるであろう。特に平家屋の別館は大リクレエーションホールとなる庭も広くて豪華な池もある、夜の系図の会には第一副支部長の周藤兄弟第二副支部長の桂兄弟を始め二十名余りの会員が熱心に集り、持って行ったテキストも忽ちにして売れると云う盛況ぶりであった。この支部は求道者も多く東京北支部出身の山田長老は北支部時代から親しい仲であったよきコンビさんポーター長老と共に寝食の時間も惜しんで家庭集会にいそしんで居られる様子であった。

○西宮支部

翌三十一日は西宮駅近くに建っている瀟洒な阪急幼稚園で開かれている西宮支部のMIAに出席した。田中兄弟や道場姉妹たちが早くから机や椅子などを運んで会場の準備をして居られた。求道者が割合いに多くスピーチのグループで列席者各人を残らずアクティビティに参加させているのはよい傾向だ。演説のテーマは最も嬉しかった時と悲しかったことであったが求道者の田中さんが系図探求の喜びを述べたのには驚嘆した。又私は最後に特別出演を頼まれたので、与えられた神権によって働らいている時が最も嬉しく、みたまを感じ得ない時が最も悲しいと話したら司会者にお褒めの言葉を頂戴した。

支部長のフーラー長老は早く自分たちの教会堂が欲しく明日ここを訪ねられる予定のヒンクレー長老に進言するのだと意気込んでいた。一週間程前に宝塚ホールを借りて催した建築資金のダンスパーティは大成功であったらしく会員たちは嬉しそうにその利益を語り合っていた。

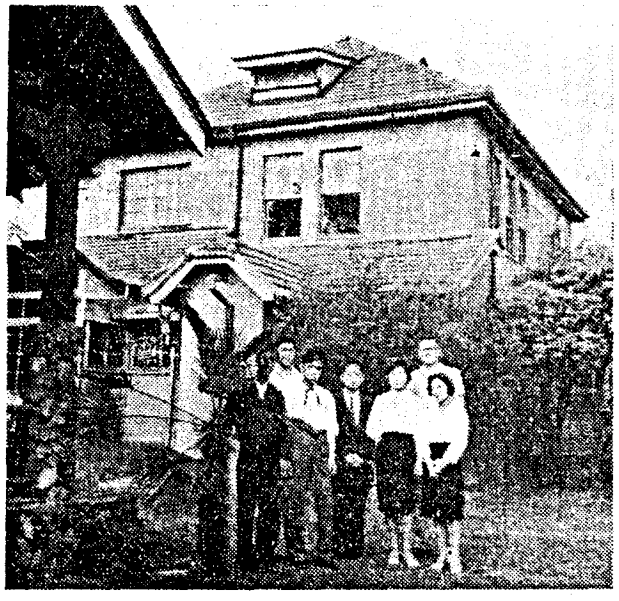
一週間前に着任したマカヒ長老は日本語の勉強に夢中で、今度の安息日には断食して祈るのだと意気込んで居られた。又明日三宮で開かれる特別大会で、先に日本に来て、今岡町支部で伝道して居られる弟さんのマカヒ長

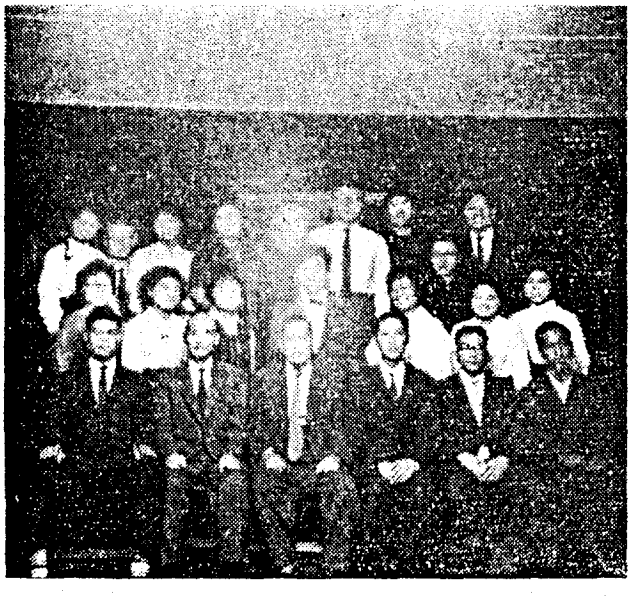
老と始めて逢うのだと胸を躍らせて居られた。

安芸第一副支部長御夫妻はＭＩＡには見えなかったが翌日の大会で、きれいに書かれたお二人の系図及び多くのファミリグループ、シートを受け取り、その御熱意に心から感謝した次第です。

○西中央地方部特別大会

翌六月一日は午後七時から三宮農業会館でヒンクレー長老を迎えて特別大会が開かれた。アンドラス伝道部長さんが通訳されたがヒンクレー長老さんの肩を叩きながら、〃この人の通訳なしで私の意志が皆様に通じないように、この教会なしで真理は伝えられない〃と説き始め、最初に話をした高木兄弟を山頂の岩の上に立ってその足下に生えている多くの若木をかばっている老木にたとえて、その五十年間の固い信仰生活を称え、机上の花盆から無造作に一本の花をとって、此の白い百合の花の如き美しく清い生活をしなさいと勤め、又長老が宣教師時代にヨーロッパの伝道部長であった人が帰国して、ワード部教会の門口に立って、忠実に歓迎者の務め





〔写真説明〕

（上）　阿倍野支部教会堂と支部有志たち

（中）　系図特別集会
（二十名余りの会員が熱心に集り持って行ったテキストもたちまちにして売れてしまった）

（下）　仲のよいポーター、山田両長老と共に。（二人ともたくましい労働者でした）

西ノ宮支部M・I・A有志たち

られた。

神戸でオランダ貿易船の船長及び機関長と話す機会があったが、私がモルモンだと言うと「ユーアー、ホーリーピープルオヴ、ラタディ」と言われ、オランダではモルモンの人をホーリーピープルと呼んで大変尊敬しているとつけ加え、更に貴方は酒も煙草もコーヒーも飲まないでしようと、親しみと尊敬の言葉をかけられたのには、びっくりし、又嬉しかった。宣教師の世界各地に於ける目ざましい働らきぶりが忍ばれて感謝の念に胸が一ぱいになった。

（未完）

をしたことを引用し、如何なる仕事にせよ教会内で働くことを力説し、右手を胸のシャツの中に入れて、この手を使わないで居ると、使えないようになってしまうと警告しユーモアにとんだ素晴らしい説教に遠く福岡、柳井、金沢から休暇を取って参加された会員たちも、ほんとに来てよかったと感激して居

「御子の後裔」

モルモン経のモーサヤ書第十五章十節以下を改めて読むように勧める。そこには何と誌してあるか。すなわち

「一〇さて、あなたらに言うが、御子の代を受け伝える者は誰であるか。ごらん、あなたたちに言うが、御子がすでに身も霊も罪祭に供えたもうた時にその後裔をごらんになるであろう。しかし誰が御子の後裔になるだろうか、あなたらはどう思うか。一一ごらん、私はあなたらに答えよう。主が降臨なしたもうことを予言したすべての聖い予言者の言葉に聞き従い、主がその民を贖い救いたもうことを信じ、贖い救われる時に自分の罪が許されることを信じて待ち望む者は、みな御子の後裔であって神の王国を嗣ぐ者となる。一二なぜならば、御子が人の罪を負い、人を罪とがから贖うために死にたもうのはこれらの人のためであるからである。それで、かれらは御子の後裔ではないか。一三およそ口を開いて予言をし、罪に陥らなかった者であって、世界が始まって以来起った聖い予言者もみなまた御子の後裔ではないか。まったく、かれらはみな御子の後裔である」。

なぜここの所が大切であるか。それはイザヤ書第五十三章十節に「されどエホバはかれを砕くことをよろこびて之をなやまし給えり。かくて彼の霊魂とがのそなえ物をなすにいたらば、彼その末を見るを得その日は永からん」（口語訳聖書では「その末」を「その子孫」としてある）としてあるからである。モーサヤ書第五章にベンジャミン王の言葉として誌してある契約を結んだ者こそ「御子の後裔」である。

〈創作劇〉

ピスガの義勇兵

大塚昌治

登場人物

ウイリアム　通称ビル　二十五才　モルモン大隊の兵士、ピスガの出身

メリー　一九才

父　メリーの父　四十五才

ウイリアムの父と親友

母　メリーの母

ジェイムス　通称ジム　メリーの弟

ロバート夫妻・ドナルド夫妻

他大勢

とき　一八四八年三月　雪どけの頃

ところ　ユタ州のソルトレーク市

粗末な開拓者の家。あたかもソルトレークに保存されている一八五〇年代の頃の堀立小屋に等しいあばらや。テーブルと四つ五つの椅子がある。上手に屋外に通ずるドアがあり下手が隣室に通ずるドアになっている。屋外に通ずるドアの近くに窓があり、カーテンがかかっている。なにかしらきちんと整理されている様子が感じられる。（母とメリーが夕食の支度にいそがしく働いている。メリーはテーブルにカバーをかけ食器を運びながら母に話しかける。）

メリー　お母さん。今日―お父さんなにか収獲あるかしら

母　さあ、どうでしょうか。このところなにもなかったから今日もないのでは

メリー　ないかしらね。そお、やっぱり悲感的？……

母　肉が食べたいな。それにパンも食べたい。もうセゴユリはあきてしまったわ。

メリー　ぜいたくを言うのではありません。この冬にもしもセゴユリの球根がなかったらどうしますか。皆がうえ死するところですよ。

母　それは私も知っています（やさしい口調で）知っていたら不平をいうのではありません。セゴユリは末日に於けるマナみたいなものだと先日みなで話したばかりではないですか。

メリー　でもお母さん、食事には変化が必要ですよ。毎日毎日同じものではね――

母　我慢我慢。忍耐心の勉強

だと思って感謝しなさい
迫害のない「自由な地」
に住めるというだけでも
幸せなんだから、食事の
我慢ぐらいなんでもない
事よ。

メリー　確かにノーヴー最後の時
の迫害の恐ろしさと物資
の欠乏からくらべれば今
の方がまだよいかもしれ
ない。

母　そうですとも。

メリー　（讃美歌八十二番〝恐る
な聖徒よ〟を小さくくち
ずさむ）

母　ウイリアムクレートンは
言って下さいました。（パ
ックに八十二番のメロー
デイが流れる）
神の国を求めむ
西遥かに
聖徒を悩ますもの
そこにあらず
歌声高めて
神をほめたたえ

父　かくことあげせむ
よしいとよし

メリー　とね。
本当に私達の言いたい事
をこの歌はよくいゝ表わ
しているわ。

母　（二人共だまってもの思
いにふける。）

――間――

メリー　（気がついたように）あら
あら、早くしないとお父
さん達が帰って来ますよ

母　（母の顔をチラッと見る
がまだ思おもいにふけっ
ている。母いそがしく下
手へ退場、メリーなにか
口の中で一人言を言って
いるがきこえない。ポッ
ンと一言小声で）ごめん
なさい。（やがてメリー
も気がついたように食卓
をととのえることをつづ
ける。父と弟のジムが帰
ってくる）
今戻って来たよ。

メリー　お帰りなさい。どうでし
たか？

ジム　あったよ。ほら（鳥が二
三羽入っている網袋を見
せる）

母　（下手より登場）お帰り
なさい。お疲れになった
でしょう。おや、なにか
えものですか。（メリー
母に網袋をわたす）

父　名も知らない鳥が三羽。
それはよかったですね。

メリー　（父とジムに）これ食べ
られるの？

母　なんだって食べられるさ

父　チキンには程とおいだろ
うが、むし焼にしたらお
いしいぞ。姉さんいやだ
ったら食べなくてもいい
よ。僕が姉さんの分まで
いただいちゃうからな。

ジム　メリーはね、今肉が食べ
たいなんて言ってた所な
の。ジムにあげるもので
すか。メリーほら腕をふ
るってよ。（網袋をメリ
ーにわたす）
はい。（いそいで下手へ
退場）

母　現金な子だこと。とたん
に元気になってしまうの
だから。
ところで母さん、五人程
馬にのった者がこの町に
入るのを遠くで見かけた
のだが、誰がどこから来
たかまだニュースは入ら
ないかね。

父　まだ誰も知らせてこない
ですよ。
三月の雪どけにすぐこの
高原に来られるのだから
まさか東部からではある
まい。うーむ。ひょっと
するとモルモン大隊かな
西からの御帰還、という
所かもしれない。

（カーテンの所から外を
みているが）お父さん誰
か馬をつれてこっちに来

ますよ。

父　どれ、（窓の所に来てみる）やっぱり、モルモン大隊の兵士だ。どこのせがれかな。ジム外に出て大声で歓迎しなさい。

ジム　（外にとび出す）モルモン大隊の兵隊さん、おかえんなさい!!

声　ジム！僕だ、ビルだよ。

ジム　ピスガにいたビルだよ。

ビル　（声のみ）ビル？あゝウイリアムさんですか。すごい髭でわからなかったな。お父さん！（部屋の中に顔を出して）ピスガのステーキのウイリアムさんですよ。

父　おゝ、ビルか。ピスガの義勇兵が帰って来たな。

（ウイリアム登場、顔中髭だらけ。メリーの父と母に挨拶する）

ビル　ようやく帰りました。

母　ごくろうさまでした。

父　一年半みないうちにだいぶたくましくなったな。僕の家族はまだピスガにいるとジョン・スミス長老の所で伺って来ましたあのスミス長老はソルトレークのステーキ部長に支持されたのだそうですね。

ビル　昨年の八月の二十二日の大会でね。その時にこの町はソルトレーク、川はヨルダンと命名されたよ

ジム　僕の家族は今年の夏にこちらにくるといってました。そしてここにいる家族の名簿をみせてくれました。知っている人がいたらそれまでやっかいになりなさい、と言われたのです。幸いお宅をみつけ飛んでまいりました。他の者はスミス長老のお世話でどこかにおちつくようです。

メリー　よく来てくれた。ノーヴーのお隣もこの三年程は離ればなれだったからな、これからは一緒だ。よろしくお願いします。

ビル　うむ。

父　こちらこそ、ビルの力をいろいろ貸して欲しいですよ。

母　なんにでも使って下さい

ビル　（ジム隣室に行く）

ジム　（声のみ）姉さん、ウイリアムさんが帰って来たよ。

メリー　（声のみ）えゝ、本当？ジムちょっとこれみててね。

ビル　（登場）ビル！　お帰りなさい。

ジム　おおメリー。どうも……しばらくでした。

母　御無事でなによりでしたありがとう。

メリー　昨年モルモン大隊の方が大勢帰ったのに、みえなかったのでどうしたのかと思っていました。

父　残って少し働いて来ました。みやげものが買いたくてね。そうそうみやげをこの家に全部さし上げます。馬からおろしてこよう。

ビル　ビル、いいわよ。今ジムにおろさせるから（下手のドアの所で）ジム、もうそれ、おろしていいわよ。

（ジム登場）

ビル　ビルの馬から荷物をおろして上げなさい。

ジム　ジム、すみません。

はい。（勢よく上手のドアから屋外に飛び出して行く）

メリー　メリー。ビルは家族が来るまで家にいる事になったのよ。

母　まあ、うれしい。

父　ピスガの義勇兵をおくな

ビル　どとは名誉なことだよ。名誉だなどと。メキシコで一回も戦争しなかった兵士ですよ。

父　それでよいのだ。ブリガム・ヤングが予言した通りなんだ。一兵も損せずしかもアメリカ合衆国に立派にモルモンの忠誠を示す事が出来た。

ビル　そうでしょうか？

父　昨年の人達の話では歩兵として歴史に残る程の大行軍を敢行したと云う事だった。貴方たちは立派な兵士だ。なにも人間と闘うばかりが兵士ではないよ。

ビル　ええ。

父　それにビル達ピスガのグループが大勢募集に応じたお陰で、五百四十九名の人員はそろう事が出来た。人呼んで貴方たちをピスガの義勇兵といっている。

ビル　はあー、でも、ガーデン・グローブやウィンター・コータースのグループからでも大勢出ていたのに僕たちだけそのように呼ばれるなどとは——。

父　いや、それはだ、ようするにモルモン大隊の募集に応ずる前にマウント・ピスカの若者たちはウィルフォード・ウッドラフの求めに応じてロッキーの先発隊に志願していただろう。本当はビルたちの方が一足早くここのソルトレークの土をブリガム・ヤングとふむはずだった。その点が高く評価されているのだよ。

ジム　そうですか。それで先発隊はいつ出発したのですか。

父　モルモン大隊に強い若者たちがかり出されたので計画が狂い翌年すなわち昨年の四月にやっとウィンター・コータースを出発した。私たちは第二陣でね。もっとも「最初の移住民」と名づけられたが——。六月と七月にそれぞれ出発した。ジョンテーラーとパーレー・ピー・プラットとが隊長だった。

ジム　（ジムドアから顔を出す）お父さん！。

メリー　おや、ジムまだ荷物をおろせないのかい。

ジム　やっと馬からはおろしたんだけど、とても重いのですよ。手をかして下さい。

ビル　よし、今行く。

ジム　（父とジムで重そうに荷物を二つ運ぶ。ビルは一つを軽く運び入れる）

ビル　ジム、だらしないのね。ごらんなさい。ビルは一人でかるがる荷物をかかえるじゃないの。ウィリアムさんにはかなわないさ。僕も十年たったらまけないな。

ジム　負けおしみ言ってるわ。大分重いけど中味何ですか。

ビル　あけてみて下さい。

ジム　（ジム袋の口をあけて中からジャガイモをとり出す）あゝ、ジャガイモだ。ありがたい。姉さんジャガイモだよ。ほら！（二つ三つほおりなげる）おいしそうだな。

ビル　（強く）ジム！　それは食物ではないのだ。

ジム　（びっくりして）どうしてです。ジャガイモが食物ではないなんて。食料難だからさっそくごちそうにないたい。マシュポテトはどうです。

ビル　（ゆっくりとさとすよう

に）ジム、残念ながらこれは品質のよいジャガイモの種子なのだ。食べたいだろうが来年翌来年の事を思い今は、我慢してくれ。

ジム　そうですか、これは種子ですか。

ビル　ビル、出かした。よいみやげを持ってきてくれた開拓者にとって種子が一番貴重品であることをよく忘れずにいてくれた。ありがとう。（ビルと父と握手する）

父　次のもあけますよ。（袋をあける）あゝ麦だ。しばらくぶりだな。（一つまみ口に入れる）これこそ食料だ。畠には麦が一面に生えているのを見たでしょう。五月にはとれますから種などもう必要ではないですよ。

ジム　ジム、残念だけど。それは格別に優秀な春まき小麦で、来月あたりまく予定なのだよ。

ビル　はあ。これは春まきですか。（だまって次の袋をあける）これも種子ですね菜種かな。

ジム　いろいろありますよ。とうもろこしや蔬菜の種など、十種類位あるはづです。

母　本当にありがとう。重い思いをしてよく持ってきてくれた。

一同　（母とメリーは食卓をとゝのえる。サラを出してきて四人分を五人分にもりつける）

母　さあ、食事の用意が出来ました。

ビル　では、食事をしながら話をするかな。

メリー　ええ。

（一同食卓につく）

ビル　ジム、お祈りをして下さい。

メリー　はい。

ビル　天のお父様

メリー　ウイリアム兄弟を無事に軍隊からお返し下さいまして

ビル　ありがとうございました。ここにともに食事にあづかること、またこの食物を与え給うた事を感謝致します。どうぞ、祝福して下さい。イエスキリストの御名によりお祈り致します。アーメン

父　アーメン。

ビル　どうぞ、えんりょなく。

父　はい、いただきます。これ今日、お父さんとジムのとって来た鳥肉です。どうぞ。

ビル　ありがとう。（食べ始める）ほお、これは変った味ですね。

父　それがセゴユリの球根です。

ビル　なかなかおいしいですよ

ビル　この煮物はなんですか。

メリー　それはあざみよ。

ビル　えっ、あざみ。あざみも食べられるのですか。

メリー　ごらんのとおりよ。

ビル　ウーンよく塩がきいてますね。

父　ソルトレークと名づけるだけあって塩は無尽蔵にとれます。ここはね。不思議にも聖地に実によく似ている。例えば死海にあたるのがソルトレークとするとヨルダン川にあたるのが同じ名前のヨルダン川。そしてガリラヤ湖に等しい真水の湖もある。ヘルモン山のような山や沙漠まである。丁度このソルトレークがエルサレムの位置にもなっているしね。

ビル　まさに聖地ですね。

父　新しいシオンの地です。ブリガム・ヤングはこの

地を以前に示現でみていたので昨年の七月二十四日この地を見た時「まさにこの土地である」といわれたのです。その後説教者達はイザヤの予言の「末の日にエホバの家、もろもろの山のいただきにかたくたち、もろもろの嶺よりも高くあがらん」というところはモルモンのロッキー山中の移住に関する箇所であると指適された。

ビル　うれしい事ですね。それで、ブリガム・ヤングは今どこにいられるのですか。

父　今、ウィンター・コータースでしょう。モルモン大隊の人たちで隊伍をととのえ昨年八月二十六日にここを去られたが、私たちはここに来る途中で出合いました。その時始めて行き先がはっきり私達に知らされ大よろこびしたものだった。

父　（食事をおえて片づけはじめる）

メリー　今湯をわかして上げますから、その髭を落しなさいよ。人相がとっても悪いわ。

ジム　人相が悪いとはひどいな、老けてみえてよいと思ってたのだが。

母　およしなさい。私は髭のないビルの方が好きです。

父　おやおや、一種の強迫だな。はっははは

母　ざんねんだけど落してしまうかな。

父　こちらえいらっしゃい。

（行きかけるメリーとビルに）

メリー、今夜ビルの歓迎ダンス・パーティーを開くかね。

母　賛成、大賛成よお父さんみなどうかね。

（口口に賛成賛成）

父　よーし。ジム近所に知らせて来てくれ。今夜七時、ピスガの義勇兵、ウィリアム兄弟の歓迎パーティーを開くとねはい。すぐ行って来ます

メリー　（上手へ退場。メリーとビル顔を見合せ笑いながら下手退場）

父　ビルは本当にたくましくなりましたね。

母　うむ。メリーの聟にしたいところだな。

メリー　私も今そう思っていたのです。

父　ノーヴーで数年も隣りに住んでいたから気心が知れていていいだろうと思う。

母　ビルの両親も本当によい人たちだしね。メリーとぜひ一緒になって欲しいですわ。ビルに話してみようかしら。

メリー　よしなさい。当人同志にまかしとく方がよいだろう。三、四ケ月は家にいる事になったのだし、まあ、自然にまかせるんだね。

（メリー登場）

父　お父さん、なにを自然にまかせるの。

母　ううーん。なに、お前には、いや、なんでもないんだ。

メリー　ききましたよ。ビルとの事でしょう。

父　なんだ、きいてしまったのか。はははは。

母　お前はビルをどう思っているの。

メリー　それは、前から好きだったけど。

父　ずい分はっきりしているのだね。

メリー　この二、三年離ればなれでしょう。ノーヴーのと

きは私は、まだ十四・五ですもの、そのときの私をビルが女性としてみてくれたかどうか解らないわ。

母　ビルは他に好きな女性があるかしら。

メリー　ピスガのときにあったかもしれないわ。でもこの夏迄デイトを独占できるから、お母さん心配しないでね。

ジム　（ジム登場）お父さん知らせてきました。皆よろこんでくるそうです。

父　ごくろうだった。では我々も顔でも洗って準備しとくかね。

ビル　（父とジムとはテーブルを部屋のすみにはこび下手へ退場）

――暗転――

（部屋が明るくなると家族四人とビルが着かざってお客を待っている。下手のドアよりドナルド夫妻、ロバート夫妻その他大勢登場する）

ビル　こんばんわ。（父と握手を合わす）

ドナルド　やあ、こんばんは、こちらはドナルド兄弟夫妻、こちらはウイリアム兄弟です。

父　はじめまして、ドナルド兄弟。

ドナルド妻　私をダンと呼んで下さい。こちらは家内です。

ビル　どうぞよろしく。

ロバート　これね、最後の粉で作ったクッキーです。めし上って下さい。

ロバート妻　ありがとうございます。（ドナルド夫妻は、メリーの母とメリーやジムと挨拶をかわす）

父　こちらはロバート兄弟夫妻です。

ビル　どうぞよろしく。

ロバート　よろしく。これ果実のビンづめです。よかったら食べて下さい。

ビル　はい、ありがとうございます。（その他大勢つめかけ、にぎやかに挨拶を交し雑談をする）

父　みなさんではバルソビンヌから始めますよ。

ロバート　先づウイリアム兄弟からおどってもらいましょう（一回拍手、ビル真中にメリーの手をとってバルソビンヌポジションに組みレコードに合せておどり始める。二人のおどるのをしばらくみてから一同もおどり出す。曲が終ると一同拍手をしあう）

――幕――

（一九五九年六月十日）

ペン・フレンド

親愛なるアンドラス伝道部長様

これまで永い間私は日本の方々に大変心をひかれてきましたので、十七才位またはそれ以上の日本の女の方と是非文通致したいと願っています。それ故どなたか私が文通できる立派な末日聖徒の女性を見つけて頂けませんでしょうか。

私の名前はロレーン・ミルスでユタ州のソルトレーク市に住んで居ります。私はこれまで当市に住んでいらっしゃる日本人の方々と親しく交際をして参りました。私は教会本部に勤めている者で御座居ます。そして現在ソルトレーク・ステーキ部のステーキ部内宣教師として働いて居ります。また私は「真理の宝の書」（MIA）のためにも働いて居りまして、海外の人々と文通することを一つの趣味として居ります。私と文通する方を見つけて下さればまことに有難き幸せに御座居ます。

私の住所は以下の通りで御座居ます。

敬具

Lorraine Mills
453 North 2nd West
Salt Lake City 16, Utah

末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粋（七）

ジョセフ・フィールディング・スミス著

第二部　時満ちたる神権時代の開始

第五章　ジョセフ・スミスの家系

（千六百三十八年—千八百五年）

六、コネティカットのジョン・マック。　母方から言うとジョセフ・スミスはジョン・マックの子孫であるが、このジョン・マックは千六百五十三年三月六日にスコットランドのインヴァーネスで生れ、千六百六十九年ころにアメリカへ渡ってまずマサチュセッツ州サリスベリーに住んだ。彼はオルランドとサラ・バグレーの間に生れた娘のサラと結婚してコネティカット州ライムに移ったが、計十二人に及ぶ彼の子供の八人以上はここで生れた。彼はコネティカットのマック一門の祖であって千七百二十一年二月二十四日に亡くなった。ジョン・マックの息子のエベネゼルは千六百九十七年十二月八日コネティカット州ライムで生れた。彼は倹約な人であってライムの住民から大いに尊敬を受けた。彼は長年の間、ライムで第二組合教会の牧師を勤め、ライムの名誉ある市民アロン・ハントレイの娘ハナと結婚した。エベネゼル・マックは一時相当大きな財産を所有して「立派な境遇と厳格な道徳の習慣の中に住んでいる人々にいつも示される注目と尊敬とをことごとく集めて上流の生活をした」。しかしながら引きつづき不運に見舞われて、彼は晩年貧困に陥った。エベネゼル・マックは九人の子女の父であった。

七、母方の祖父母。　エベネゼル・マックの息子ソロモンは千七百三十五年九月二十六日コネティカット州ライムで生れた。二十一才の時彼は兵役に服してホィッティング大佐の連隊に属するヘンリー大尉の指揮下に入った。彼はフォート・エドワードに軍需品を運ぶ二組の馬車隊と共に

公用に従事した。千七百四十八年にはスペンサー少佐の隊に入って数回血なまぐさい戦闘に従事し奇蹟的に生命を全うした。彼は千七百五十九年の春まで軍務に服しクラウン・ポイントで立派に除隊された。除隊された年に彼はコネティカット州イースト・ハッダムに住む富裕な市民ナサン・ゲーツの娘で当時若い学校教師であったリディア・ゲーツに会った。この若い二人の友情が熟して二人は知り合ってから間もなく結婚した。千七百六十一年にソロモンと彼の若い妻とはマーローに移り、其所で彼らは荒野の中に住居を定めた。そこでは彼らのまわり四十マイル以内に彼らのほかに四家族が住んでいただけであった。ソロモンが彼の妻のもっているすぐれた美徳の真価を知るようになったのはここに居た間のことであった。彼の手記には「私たちの子供らは行くべき学校がなかったので、妻は彼らを教育する責任を引き受けて、母親のほかに何人もなし得ない女教師の義務を果したからである。数々の教訓は子供たちのものであるようないろいろの実例を伴って子供たちの心に忘れられない印象を与えるように工夫された。妻は普通教育のいろいろな部門を教えたほかに、朝も晩も子供らを呼び集めて祈ることを教えるのを常とした。またその間にも彼らの創り主に対する祈りの心持ちはもちろんお互いに対しても愛の心を持たねばならぬことを力説した」と誌してある。このようにして、ソロモン・マックの子供らはいろいろな美徳をしっかり身につけ彼らの贖い主を信ずる信仰が固くなった。

七、ソロモン・マックの愛国的奉仕。　千七百七十六年ソロモン・マックはアメリカ陸軍に入隊した。彼は暫くの間陸軍で軍務に服していたが後に海軍へ転じた。彼は自分の二人の息子、ジェーソンおよびスティーヴンと共にヘヴンス大尉指揮の下に商船捕獲の行動に従事した。この任務の間に彼らは度々ぞっとするような危い目に逢ったが大したけがも受けずにすんだ。彼が従事した期間は約四年に亘っている。彼は除隊してからニューハムプシャーのギルサムへ行きそこで家庭を持った。しかし、二度の戦を通じてきびしい従軍をしたために彼は健康をそこない晩年に及んでかなり苦しんだ。彼の息子スティーヴンは始めヴァーモントに移ったがその後デトロイトへ行き、そこで商業に従事して、デトロイトを創設した人々の一人となった。千八百十二年の戦争中にスティーヴンは再び兵役に服した。彼はデトロイトの籠城のとき大尉に任命する辞令を受けていたが、上官から降服せよとの命を受けるや降服することをはっきり拒絶した。彼は剣を膝に当てがってこれを二つに折ると湖の中に投げ込み、自分の血管にアメリカ人の血潮が脈打っている間はこのような不名誉な妥協には服さないと言った。ジョセフ・スミスの先祖の性格はかくの如くであった。

第六章　ジョセフ・スミスの少年時代

（千八百五年―千八百二十年）

一、予言者ジョセフ・スミスの誕生。　アセルの息子のジョセフ・スミスは千七百七十一年七月十二日にトップス・フィールドで生れた。十八世紀の終りに近いころ彼はヴァーモント州タンブリッジに住まって立派な農場を持ち土地を耕やしていた。彼が、後に彼の妻となったギルサムの住人マック・ソロモンの娘ルシイ・マックに会ったのはこの地であった。彼女は当時タンブリッジに住んでいた自分の兄弟スティーヴンの家に滞在していたのであった。ジョセフ・スミスは彼女と結婚してから約六年間ひきつずきタンブリッジに住んでいた。千八百二年に彼は自分の農場を賃貸して、商売を営むためにランドルフへ移転した。後にタンブリッジにある農場を売払ってロイヤルトンに移り、それから更にウインゾル郡シャロンに移ったが、ここで千八百五年十二月に二人の間に息子のジョセフが生れたのである。千八百十一年にスミス一家はヴァーモントからニューハムプシャーのレバノンへ移った。ここは僅かに境界線を越えたところにあったが、二人はここに落着こうと思い、かって彼らの努力に伴った繁栄を「喜びと満足とを以て期待し始めた」。二人は大ていの両親が欲するように、子供たちに何不自由なく必要な物を与え、また教育の便宜をも与えたいと思った。この願いについて母のルシイは次のように誌している。

二、スミス一家の初期の奮闘。　「私たちの子供らはこれまで学校教育を受ける特権を大層さまたげられていたので、私たちはこの大切な義務に精を出すようあらゆる手配をし始めた。私たちは二男のハイラムをハノーヴァーのある高等学校へ入れた。そして残りの者はすでに学齢に達していたから手近かの小学校へ通わせていた。その間私と夫とは将来の幸福と家族の利益とになるよう力の及ぶ限りを尽していた。そして私たちの骨折りは大きな恵みを受けた」。しかしながら、これらの願いはこっぱみじんに砕かれた。それは発疹チフスが国中に流行してスミス一家の子供たちがひどくこれに苦しめられたからである。男女のソフロニヤは長い間頻死の床に横わっていたが、助かったのは全く祈りに応えたもうた神の御旨による。ジョセフは二週間病床に臥した後熱病の方はなおったが、肩に非常な痛みを覚えて独り苦しんだ。それは始め筋を違えた結果であると思って治療を施したが、後になって新しい事実はそれが別の原因から来ていることを証明した。うみが溜ってふくれ上りそこを切開しなければならなかった。彼の苦しんだ様は次のような言葉で母親が真に迫って語っている。

三、ジョセフ・スミスの激しい苦悩。　「はれもののうみが出てしまうと痛みはそこを去って（あの子の言葉で

言うと）電光のように横腹を走り下って足の骨髄の中へ入り、間もなく非常にひどくなった。かわいそうにあの子はこれでほとんど絶望して『お父さん、もう痛くて痛くてたまらないよ』と叫んだ。あの子の足は間もなく腫れ上り始め、あの子はそれからもう二週間ひきつづき世にもひどい苦痛を受けた。この間中、私はできるだけあの子の苦痛を和らげるために、大ていあの子を抱いていた。そのために私も大へん体が悪くなった。私の受けた心配は働き過ぎと共に私の体には堪え切れなかったので、私の体力はそれがためにすっかり弱ってしまった。

四、ハイラム・スミスの親切。　「むしろ驚ろくほど親切で同情心のあったハイラムは、こうなっては私の代りに看護をしたいと言った。この子は頼みになる良い子であったので私たちはそうさせることにした。そしてできるだけ楽に看護をさせるようにジョセフを低い寝台に寝せた。ハイラムはほとんど夜昼、かなりの長い間ジョセフの側に坐って足の痛む所を両手で持ち、苦痛に悩む弟が痛みをこらえることのできるよう手と手を以てそこを押えつけていた。足の痛みはとてもひどくてジョセフはほとんど痛みに堪えられなかった。

五、外科医の手当を乞う。　「こうして三週間経ったとき、私たちはもう一度外科医を迎えにやるのが得策であると思った。そして外科医が来たとき、彼はジョセフの足の表側のところを膝頭からくるぶしの間八インチの長さにわたって切開した。その結果痛みが大層少くなって病人は傷がなおり始めるまで全く楽であった。すると痛みがまた前のように激しくなった。そこでまた外科医に来てもらうと、この度医者は傷口をひろげて骨に達するまで切開を施した。この結果足は再びなおり始めたが、なおり始めるやまた腫れ始め、その腫れがどんどん大きくなって行ったからついに私たちは数人の外科医に協議してもらうことが賢明であると考えた。そして医者が協議のために会合したとき足を切断するのが唯一の療法であると決まった。

六、会議を開く。　「この結論に達するとすぐに外科医たちは私の家の入口へ車を乗りつけた。そしてジョセフの寝ている部屋から離れている一室へ迎え入れられた。外科医たちの席が定まると私は次のように話しかけた「皆さま、私の子供の足を救うためにどのような処置をなさることができますか」。　すると「何も処置ができません。足を骨のところまで切開してみて患部が非常に犯されていることがわかりましたから、御病人の足はなおらないと考えます。従って、御病人の生命を救うためには足を切断することが絶対に必要であると考えます」というのが外科医たちの答えであった。これは私にとって落雷のようであった。私は主だった外科医に向って訴えた「ストーン先生、あなたは別の方法をやってみることができませんでしょうか。

伝道本部だより

バプテスマ

高橋輝彦　旭川　藤井重幸　東京中
月岡清子　福岡　佐藤みさ子　〃
竹島きよ子　広島　土田さよ子　東京北
田村久夫　〃　野崎房子　〃
谷口紀久子　〃　星野光子　東京南
古謝栄子　那覇　石井幹　〃
国場幸昭　〃　太田幸恵　東京西
大宜見幸子　〃　上田はな　〃
洲鎌孝子　〃　弘津芳枝　柳井
西山サダ　新潟　坂本洋子　横浜
斉藤タカ　〃
黒住征次　岡山
西原晴起　〃
上島輝元　〃
渡辺善弘　〃
宮本弘子　札幌

他に韓国に三十四名のバプテスマがありました。

神権

○執事

アリハシ　ショオジロオ
阿倍野　盛永保　旭川
谷川功　旭川
小田俊博　広島
築田博　〃
河原地富雄　松本
コシバ　ケンゾオ　名古屋
ワカマツ　ミチノリ　〃
当間ケンヂ　那覇
坂本恒夫　札幌
佐藤貢　〃
渡会功　〃
神崎良太郎　東京北
高柳郷行　〃
山田友次　東京西
岩崎和夫　横浜

○教師

小島利夫　阿倍野
土田和夫　旭川
引寺辰夫　広島
加藤武行　〃
成林孝治　〃
佐藤イサオ　室蘭
アラキ　ケイイチ　那覇
児島吉彦　札幌
倉見光男　〃
坂本恒夫　〃
鮫島邦彦　〃
高橋良臣　〃
松浦高安　東京北

○祭司

松島　ヤスヒロ　名古屋
平野隆弘　札幌
木野隆弘　〃
小林整功　〃
岩佐邦次　横浜
小泉裕功　〃

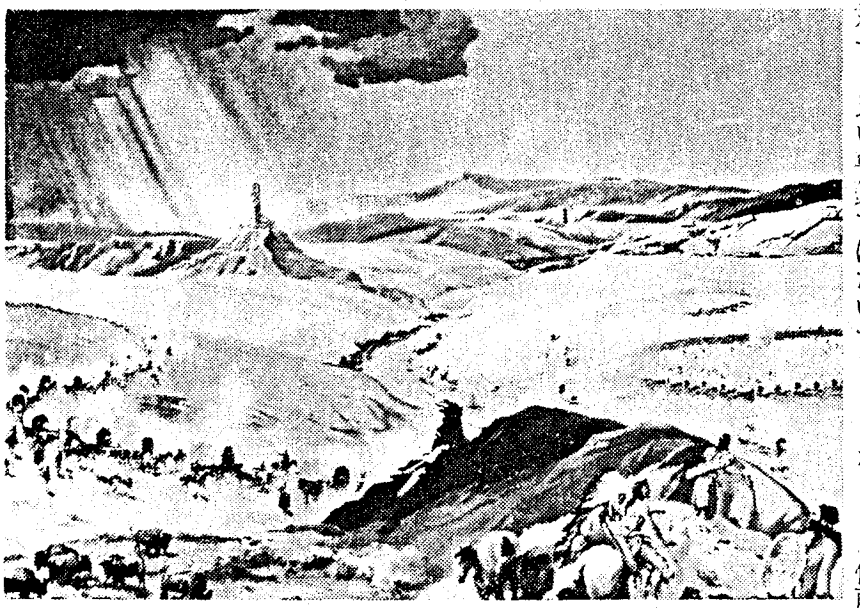
他に韓国に執事三名、教師三名の聖任がありました。

支部所在地

阿倍野	大阪市阿倍野区阪南町中一ノ三八
旭川	旭川市八条五丁目
福岡	福岡市薬院大通二ノ五五
群馬	高崎市並榎町二七五
広島	広島市古田町古江四〇〇ノ三
金沢	金沢市成瀬町一一ノ四　野田方
甲府	甲府市富士見町一
松本	松本市沢村一六〇四
室蘭	室蘭市幸町八九
名古屋	名古屋市昭和区北山町三ノ四一
新潟	新潟市中大畑町五五七　金井方
西ノ宮	兵庫県西ノ宮市田代町一一一
岡町	大阪府豊中市岡町北二ノ一八
岡山	岡山市国富一ノ一一九　丹下方
小樽	小樽市富岡町一ノ三五
三ノ宮	神戸市灘区篠原本町四ノ三五
札幌	札幌市北二条西二四丁目
仙台	仙台市光禅寺通り二八
東京中央	東京都渋谷区八幡通一ノ三四
東京北	東京都豊島区椎名町四ノ二〇六八
東京南	東京都大田区南千束町二四九
東京西	東京都武蔵野市吉祥寺三六八
山形	山形市飯訪町三九七
柳井	山口県柳井市今市三九一
横浜	横浜市港北区篠原町二九
普天間	沖縄宜野湾村野嵩区三二八
那覇	沖縄那覇市松尾区一三九

編集後記

七月は「開拓者の月」であります。由来、モルモンの精神はしばしば開拓者精神によって代表されて居ります。かってブリガム・ヤング大管長の唱えた「質実剛健」の精神は、これからわが国で陰に陽に奨励されようとしている「浪費道徳」に対する良い警鐘ではないでしょうか。（佐藤）

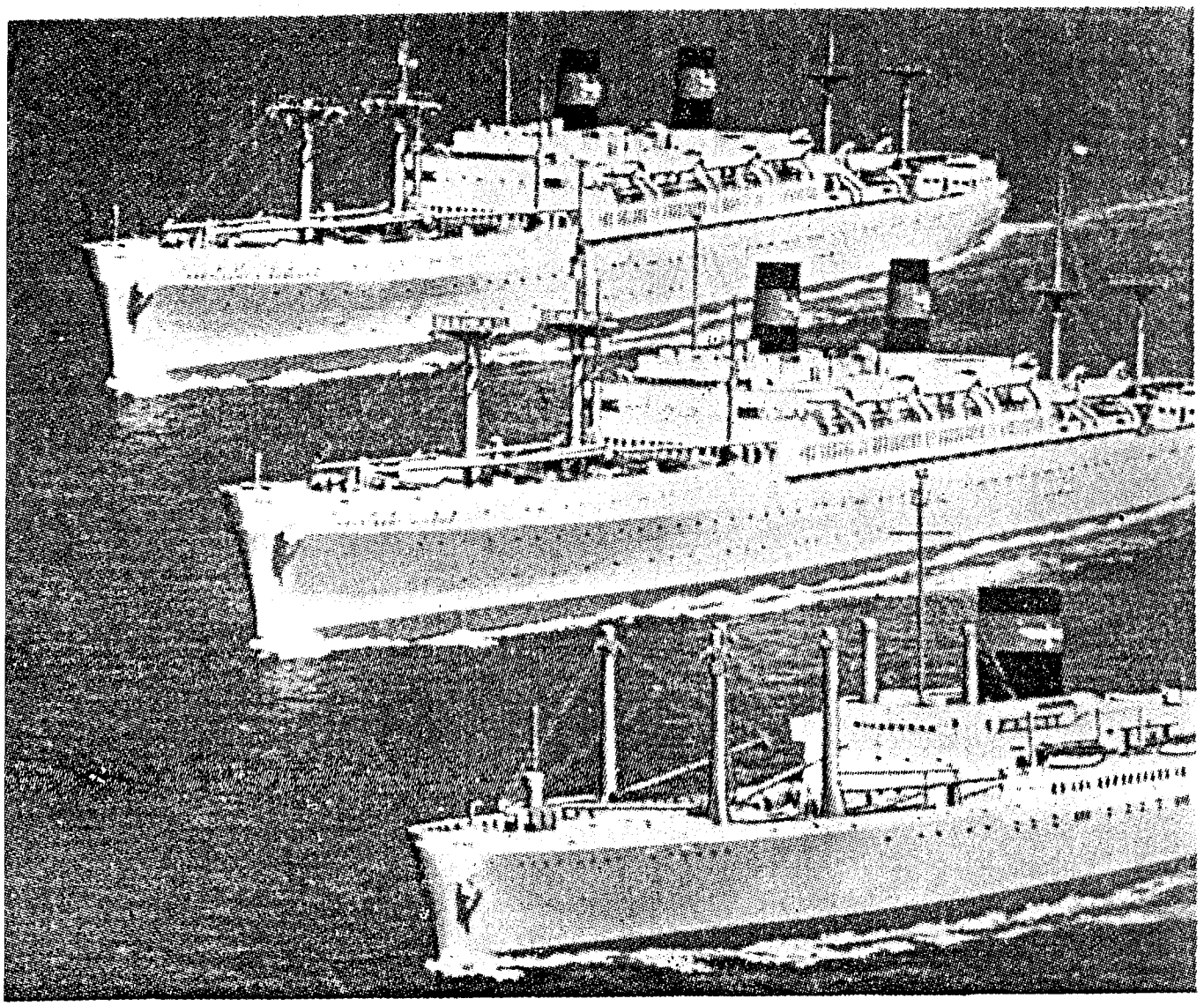


7月号表紙　モルモン開拓者の図

この末日に回復された神の王国の土台となっているのがこのモルモンの開拓精神で、これは世界の民の称讃のまととなっている。モルモンは又神殿を建てる民だとも呼ばれているが此の日本の地にも早く神殿を建てていたゞく為に会員の一人々々がこのモルモンの開拓精神を以て系図探求に精進しようではありませんか。（渡部）

渡部兄弟の「聖地を巡りて」は今月号より九月号にわたり三回にわけて掲載致します。末日聖徒たちのいるところ、それはすなわち聖地とみたてた彼の旅行記は広島に致り最高頂にたっします。御期待下さい。（大塚）

月刊「聖徒の道」第四巻第七号
一九六〇年七月一日発行
実価　一ケ年　三百円
一　部　三十円
編集兼発行人　ポール・C・アンドラス
発行所　東京都港区麻布広尾町十四
末日聖徒イエス・キリスト教会
北部極東伝道部



アメリカ向定期に出帆する
豪華船プレジデント号

明日といわず、今すぐ桑港向け出帆の一等とエコノミイ・クラスの完備したプレジデント・ウイルソン号又は姉妹船クリブランド号又はプレジデント・フーバー号(一等のみ)に御乗船の予約を御申込み下さい。
豪華なプレジデント・スタイルで素晴らしい航海をお約束申し上げます。
御希望によって、海外連絡スケジュールを組むこともできます。早速弊社支店又は代理店にお問合せ下さい。

AMERICAN PRESIDENT LINES

太平洋横断　　世界一周

東京 (201) 6831－8　横浜 (8) 7541－5　神戸 (3) 5381－4　大阪 (23) 0260